

池窪弘務作品集 1 小説 1

[ホームに戻る](#)

目次 リンクをクリックして下さい。

[作品 1](#) 眠っている間に

星と泉 2号 (2009年) 『眠りの間に』を改題

[作品 2](#) 蛍

[作品 3](#) ムッシュユ

星と泉 4号 (2010年) 『敦賀』を改題

[作品 4](#) 一期一会の女

星と泉 7号 (2011年)

[【後記】](#)

一 夢

六畳一間のアパートに男と住んでいる。男は太郎という平凡極まりない名前をつけられていた。私は朱雀^{すざく}。この名前も変だ。

いちにち一日。太郎は朝の六時に起きる。小用をして、歯を磨き、顔を洗う。野菜サラダを作り、トースターで濃いめに食パンを焼く。自分の分だけ作る。

「どんな夢を見た」

太郎は卓袱台でパンを食べながら寝床の私にいつも同じ事を聞く。

「覚えていない」

私はいつも同じ答を返す。

「僕は、子供の頃の夢を見た」

太郎は夢の中で聞いた童歌を歌ってくれた。

かごめかごめ 籠の中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に 鶴と亀が滑った

後ろの正面だあれ？

本当は太郎に抱かれている夢を見た。思い出そうと目を閉じるが、何も見えない。まぶたの闇は夢の闇とは違う。太郎は夢の中にいた。きめ細かい肌。熱く強い性器。激しく打つ鼓動。

太郎は七時に部屋を出て行く。ドアの閉まる音を聞いて私は起きる。トイレにも洗面所にも太郎の名残はない。卓袱台も、キッチンも片付いている。完璧に。誰もいなかったように。野菜サラダを作り、トースターで濃いめに食パンを焼く。インスタントコーヒーを入れる。食パンにバターを多めに塗る。牛乳をコップ一杯飲む。テレビで「おはよう朝日」を見る。宮根誠司の「行ってらっしゃい」という言葉で、テレビを切る。ぶらりと街に出る。仕事は携帯電話にかかってくる。

「朱雀さんですか」

「はい」

「掲示板を見ました」

男と待ち合わせて、セックスをする。料金をもらう。同じ男とは二度としない。別れ際に「約束を破ったら、怖い人を呼ぶ」と脅す。だから、いつも新しい男が私の前に姿を現す。でも、みんな一緒だ。一日一人。終わったら携帯電話の電源を切る。

一度も電話がかからない日もある。午後三時まで待つ。三時を過ぎると、携帯電話の電源を切って、映画を見る。つまらない映画でもかまわない。闇に身を潜めていると気持ちが悪く落ち着く。

交代で夕食をつくる。つくる気がしない時は、マックを買ってきたり、コンビニ弁当で済ますこともある。でも、当番はきっちり守る。ご飯がすむと、二人で食器を洗う。当番が洗い、もう一人が拭く。卓袱台を拭き、今日のご褒美に缶ビールを半分つこする。そして、少し話をする。

「今夜はどんな夢を見るか楽しみだ」

と、太郎は言う。太郎は夢のはなしが好きだ。私は殆ど聞き役だ。

「夢は直ぐに忘れるからね。何日もひきずることがない。でも……」

長い沈黙の後、彼が何を話していたのかあやふやになった時、とても静かに言葉を続ける。

「忘れてしまった夢をいつも引きずっているのかも知れないね」

私は太郎の年令も、仕事も知らない。一つの部屋に住みながら、セックスもない。雨宿りで一緒になつて、太郎が私の影のようになってきた。

彼は私の目を見る。

「君は夢を見ないのか」

「一度も見たことがない」

私はさらりと言う。

「そう、それは良いことだよ。世界が一つしかない」

私にはいくつもの世界がある。夢で太郎と交わる世界。知らない男と交わる世界。映画館の暗闇。太郎が眠ったあと、ネットで繋がる世界。みんな私の世界だ。いつの間にか、太郎は静かな寢息を立てている。彼は存在するのだろうか。そして、私は、今夜どんな夢を見るのだろうか。

二 言葉のない村

夕食のあと、卓袱台に二人は向かい合う。太郎は夢の話をする。私は太郎の夢の話が好きだ。

夢の中で目が覚めた。奇妙な事だけど、そうしか言いようがない。いつもの寢床だ。起きてドアを開けると、まだ、夜が明けていない。風景がまるで違う。僕は森の中にいた。そこは言葉のない村だった。だから、とても静かだ。村で人が一人死ぬと、種を一つ植える。その種から一人生まれる。だから、人数は変わらない。何人か知らないけれどね。村人には性がない。男女の区別がない。とても静かな人たちだ。彼等は森の精を呼吸して生きている。一人一人が小さな穴で生活している。言葉に代わるのは瞳だ。互いに瞳を覗き込んで相手を知る。分かると、瞳が青に変わる。いつもは白だ。瞳には青と白しかない。

森には清流がある。彼等は裸で向かい合って、青と白の瞳で交流する。村には見えない動物がいる。

動物も声を失っている。村人の手が動物を撫でていく。時々、僕の側を風のように通りぬけていく。

私と太郎は裸で向かい合っている。やがて眠る時間がある。

三 戻れない場所

「ただ乗りはあかんよ」と言うと、男は初めて笑った。

「大丈夫。日当十日分」

「嫌なら帰ってもいいよ」

男は所定のお金を払った。唇の薄い男だ。細いフレームの眼鏡をかけていた。

「女は知らん。機会がなかった」

私は応えなかった。男は卑屈な笑いを浮かべた。

「仕事をクビになった。金が尽きたらホームレスよ。他人ばっかりの都会で、僕はよう生きていかん。誰も知らん奴ばかりや」

「シャワーを使う？」

「そうだね、蒸すね。梅雨入りしたのかなあ」

リュックサックにナイフが三本入っていた。剥き出しではなくきちんと包装されていた。

性器が触れ合うこともなく男は果てた。

「もう一度する？」

男はまた、卑屈な笑みを浮かべて、首を振った。

煙草を勧めたが、「吸わない」と言った。「吸ったこともない」

「家には帰れんし、都会の迷路で野垂れ死に」

「誰でもそうよ。一步先は」

「何で生きているんだろう俺たち」

「俺たち……」

「ごめん。友達なんて一人もない。みんなそうだよ。一人一人がバラバラ。不安だから群れているだけ」

煙草の煙を見上げながら男は言った。

「死んでしまえば」

私は言った。男は黙って私を見た。そして、私の煙草を取って吸った。激しく咽せた。

帰り際、「ありがとう」と、男は小さく言った。

二度と会わないという約束を忘れた。男とは会うことはないだろう。どこかへ行ってしまおう。二度と戻れない場所に。

四 リモコン

私は父親を知らない。一卵性双生児のような母親に育てられた。母に叱られた事も、ほめられた事もない。買い物に行っても、母は幼い私に相談をした。

「どちらかなあ。おいしそうなリングはどちらかなあ」 「どっちの服がいいと思う」。母は子供が欲しかったのではない。友達が欲しかったのだ。私が二十歳になった時、当然のように母子は別れた。それから一度も会っていない。

雨の音で目覚めた。ドアを小さく叩く音がした。ドアを開けると、見知らぬ男が立っていた。右手にリモコンを持っている。私はずいぶん前から男が父親だと知っている。

居間に扇風機がある。九月も半ば、つけることはほとんどはない。

でもそこにある。太郎は無頓着だ。私は時々、空気を動かすのにスイッチを入れる。だから、冬になっても扇風機は居場所があるのかも知れない。

六 扇風機 2

太郎が扇風機の羽根を拭いている。とても丁寧に。終わると二人できれいな風に当たった。耳を澄ますと、秋の虫の音がする。私は太郎にもたれかかって虫の声を聞いた。

「あの虫いつまで生きるんだろう」と太郎が言った。「永遠に生きるよ」と私は言った。

一日でも永遠。太郎は黙って私の髪を撫でた。死ぬのなんて怖くない。

七 傷

恐がりの私は滅多に怪我をしないのに、スライス器（正しくはなんて言うのだろう。キュウリをスライスしたり、山芋をすり下ろしたりする調理器具）で親指の先を切ってしまった。血が出て痛かった。テープを貼ると少しましになった。二日目テープを取るとまだ血が出た。痛みもある。四日目には直っていた。傷跡もなかった。私の傷を治したのは私の中にある命だと思う。生命いのちの営みだと思う。私の中で無数の命が動いている。命が私をつくっている。私はうずくまり、私の中で起こっていることを感じようとする。目を閉じると、無数の命が見える。無数の命を感じる。生きているのが怖い。

八 青木さん1

ある日娼婦の仕事が急に嫌になった。あの仕事をするぐらいなら死んだ方がいいと思った。男の匂いがたまらなく嫌になった。でも、働かなくては生きていけない。太郎に食べさせてもらうわけにはいかない。太郎とはそんな関係ではない。新聞のチラシ

にあった。スーパー浦西。時給700円。私は初めて履歴書を書いた。

××短大卒業。職歴なし。

店長は若い男だった。24才の私とたいして違わないだろう。

「まずレジをお願いします」

青木さんを紹介された。50才ぐらいのおばさんだった。私は並んでおばさんの仕事を見ていた。しわがれた声。風邪を引いているのかと思ったが地声らしい。バーコードを読み込ませる。物によっては入力する。客からのお金を入力する。釣り銭が自動で出てくる。レシートと釣り銭を客に渡す。例外もある。レジで50%引きなら、レジ打ちが複雑になる。総菜などバーコードがない物は一覧表を見る。青木さんはほとんど見ない、覚えているのだ。バーコードがない商品も結構多い。これは大変だ。私に出来るかしら。私は頭が悪い。

「大丈夫よ。なれだから」

私の心の中を見透かしたように青木さんが言った。客が途絶えたとき私がレジに入った。青木さんが横

に立つ。青木さんが簡単にこなしていた仕事は私には簡単ではない。バーコードが一度で読めない。焦ると二度読んでしまう。客の怪訝そうな目が私を射るように見る。目を皿のようにしてレシートを見る。主婦ってなんて意地が悪いのだろう。一日が終わるとくたくたになった。でも気持ちがいい。とても。「ありがとうございます」と言っても、青木さんは黙っていた。青木さんは遅番であと1時間残る。一週間経って、一人でレジに立った。気を抜くとあつという間に客が並ぶ。二人以上並ばすながノルマなのに。

「家に遊びに来ない？」

青木さんが言った。レジに並んでいた時以外ほとんど話すことがなかった。青木さんと言うより、私は店の人とほとんど喋らなかった。昼食は外でパンを食べていた。店員のほとんどが店で買うのに、私はコンビニで買った。変な子だと思われているだろう。でも、娼婦だなんて誰も思わないだろう。でも、娼婦だよ。

何時もなら断った。でも、青木さんには借りがあ

った。うなずいてしまった。

九 ひずみ

太郎との生活にひずみが出来た。太郎は外に出なくなつた。

太郎がいなくなつた。服に血をつけて帰ってきた。

「どうしたの？」

と、私が言うと、

「どうしても」

と、太郎は言った。

近くで人が殺された。

「あなたじゃないの？」

と、聞くと、

「そうだよ」

と、太郎は答えた。

目が覚めた。いつもより、30分遅い。トイレにも洗面所にも太郎の名残はない。卓袱台も、キッチンも片付いている。完璧に。誰もいなかったように。

夢だった。夢と現実はそれほど違うのだろうか。いつでも振り子のように入れ替わる。

十 青木さん 2

青木さんの家は四軒つながった長屋の一番左だった。小さな家だ。中は二間。私のアパートと同じだ。スーパー浦西で買ってきた総菜をテーブルに並べた。ガラッと戸が開いて、ごま塩頭の男が顔を出した。

「お帰り」

男は急いで戸を閉めた。

「夫よ。恥ずかしがり屋なんだ」

青木さんは携帯電話をかけた。部屋の隅に行って、何か喋っている。

「すぐにうるさくなるよ」

携帯電話をたたんで青木さんは言った。

ご主人はうつむき気味にテーブルについた。テレビのチャンネルを変えたりしている。三人でビールを一本空けた頃から、ご主人は急に饒舌になった。なるほどうるさくなった。仕事はトラックの運転手。

「お子さんは？」

と、聞いた。

「高二的の男の子。今は塾に行っている」

「鳶が鷹を生んだといきたいところだが、やっぱり

鳶は鳶」

と、ご主人。

「大学は誰でも入れる時代だから、行かせてやりた
いね。私は中学しか出ていないからね」

ご主人はビールから焼酎に変わっている。

「ただいま」

男の子が帰ってきた。

「お帰り、一緒に食べよう」

「いいよ」

男の子は机の前に腰掛けた。青木さんは総菜を皿
に取り、大きな茶碗にご飯を大盛りにした。

「よく食べるのよ」

と、青木さんは笑った。

青木さんの家の話をしたら、急に太郎が泣き出し
た。泣くようなことは何もないのに、太郎は泣いた。

太郎のことを何も知らない私は、一緒に泣くことしかできない。二人はただ泣いていた。

十一 泡

スーパー浦西で突然私は壊れた。レモンを嚙り、バナナを卑猥に食べた。店長が私を事務室に連れて行った。

「どうしたのですか？」

「私は時々壊れる」

「壊れる？」

「前は高校の時、教室で壊れた」

「どうしますか？ 沢山のお客さんが見ていましたからね」

「すみません、辞めさせていただきます」

「残念ですが。少し待って下さい。精算しますから」

精算という言葉がおかしかったので笑った。もう娼婦に戻れないし、死のうかなあと思った。太郎も、あの泣いた夜の次の日から帰ってこない。太郎なん

ていたのだろうか。眠っている間に生まれて、残像が少し残って、また、眠っている間に帰って行く。給料をもらって事務所を出た。店内は今までと違う世界のように見えた。青木さんの背中に頭を下げて、スーパー浦西を出た。もう秋の気配が濃い。嫌な冬も駆け足でやってくるだろう。

四年ぶりに母が来た。

「よくここが分かったね」

「朱雀が好きそうな町だから」

「そう、浦西は私が好きそうな町。入って」

私はドアを開けた。

二人は黙って向かい合いながらビールを飲んだ。

「一人なのね」

「そうよ」

「仕事は？」

「今日辞めた。壊れたから」

「壊れた？」

「うん」

母は暫く黙ってビールを飲んでいった。私は冷蔵庫からハムを取り出して切った。それとビールを二本。

「壊れるから、生まれるのよ。崖の上のポニョを観たの」

母は背中を向けたまま言った。

「お母さん、映画なんて観るの」

ハムの皿とビールを持った私が言った。

「観るわよ映画ぐらい。子供が一杯だった。ポニー

ヨ ポーニヨ ポニヨ さかなの子 青い海からやって

きた」

やっぱり音痴だ。

「映画の中で『みんな泡から生まれる』というセリフがあるの」

「泡から生まれる……」

「パチンと泡がはじけて、もう昨日には戻れない。

眠っている間に、また、明日の新しい泡が浮かぶ」

母はそう言って、新しいビールの栓を開けた。

うたたねから覚めると、母の姿はなかった。母の居場所も聞かなかった。会いたくなったら会いに来るだろう。そんな距離がいいと思う。コップもビール瓶もきれいに片付けてある。明日一日生きてみようと思った。

平成二〇年十二月七日（日）了

一 山深い村

もう、三十年以上前になる。昭和四〇年、父の仕事の関係で、私はS県の山中の村に一年ほど住んだことがある。父は道路のトンネル工事に関係していた。現場に近いK村の役場に派遣されてきたS県の公務員だった。幼かった私には父の仕事の詳しいことは分からないが、工事の進み具合の報告や事務の仕事をしていたようだ。役場の机を借りるような格好で算盤をはじめいていた姿を覚えている。トンネルはS県とK府を隔てる山腹を貫通し、従来からの県境の難所H峠の道を三分の一以上短縮するものだった。しかし、初めから難工事が予想され、何年かかるかめどが立たない、いつになったら県庁に戻れるか分からないというのが、一家をあげて村にやってきた理由だった。

同じ時期に、もう一組、同じ理由でK府から村にやってきた父子がいた。

所々に雪を残した山嶺が果てることなく続き、山腹に薄い霧が流れていた。霧が消えると、山の深さが際立った。バスは細い道を何度もカーブを切りながら、上り下りを繰り返し、山の深い懐に吸い込まれて行った。眼下には、様々に変化して現れる川があった。岩を削るような激しい流れ、ゆったりと青に沈む流れ、遙か下方に曲がりくねった線を引く流れ。

バスは川を遡行するように走った。一つの集落を抜けると、また、用意されていたように川が現れた。白く飛び散る無数のしぶきと水の流れが、春の田にも、茅葺きの屋根にも、次々に姿を変える山にも、連続して映っていた。

なにもかもの背景に川の流れがあるように思えた。父は一番後部の座席に荷物に埋もれるようにして目を閉じていた。母は胸元を気にしながら妹の保子に乳首を含ませていた。乗客は私達だけだった。運転手は無言でバスを走らせ、時々荒々しく警笛を鳴らした。

「どこまでな？」

突然、運転手は振り向いて言った。

一瞬三人は緊張した。

「K役場です」

父が答える。

すぐに車内はバスの立てる音だけに戻った。父は先に一度来ている。私と乳呑児のいる母は初めてだった。母は時計を何度も見ていた。父から聞いている時間を時計の針で計り、あと、何分と独り言を呟いた。三人は殆ど無言だった。初めての道は思った以上に遠く、時間が聞いていたよりも随分長く感じられた。

「もうすぐね」

父のそばの座席に移り、母は聞いた。父は無言で頷いた。

私の不安が現実的な姿を現し段々と近づいてくるように思われた。なにが不安なのかと問われても、答えようのない漠然としていたものが、もうすぐねという言葉を目にしたとたん、川にかかる長い赤い橋や、時々バスに触れ、カサカサと音をたてる木の

葉の気配や、目を閉じても見える川の流れの中に明確に立ち上がってくるように思えた。

バスがエンジンをふかす激しい音と土煙を残して視界から消えると、急に、置き去りにされたような気持になった。

山の裾が川の向こう岸に急な斜面を落としている。私の位置からは一軒の家も見えない。街道はすぐに林のなかに消え、その向こうにまた、山嶺が薄い線を引いていた。

生活の音も、匂いもなかった。村が、その姿と生活の気配を消し、異分子の一举一動を、その息遣いまでもを、じっと見つめているような気がした。

「誰か迎えに出てくれているかと思ったんやが」

父は荷物を足元に下ろし、気落した口調で言った。

「役場に勤める訳ではないんですから」

母は保子を負いながら言った。

「とにかく、都落ちなんて気持を持たんことや。住めば都さ」

父は荷物を両手に下げ、勢いよく歩き出した。家族は下方に川を見ながら、人気がない街道の端を一

列になって続いた。

四月も半ばを過ぎているのに、頬にあたる風が冷たかった。

「空気が旨い。町と大違いや」

父は、明るく言った。

私と母はそんな父の影を追うように歩いた。桜の木が四、五本植っていて、今が満開だった。

「町より十日は遅いな」

と、父は言った。

桜の木の向こうに古い木造の役場があった。中に入ると、職員と居合わせた村人が一斉に三人を見た。町では次の瞬間には目を反らすのだが、彼等はじっと見たままだった。

「えらい遠いところを、ようおこし」

奥の方から赤銅色の顔をした年配の男が声をかけた。助役の田島さんだった。

「お世話になります」

父は田島さんと挨拶を交わし、母と私を紹介した。それから、父は部屋の奥で、田島さんと長い話をした。母と私は、待合の長椅子で父の話が終わるのを

待った。途中、保子がむずがったので、母は保子を抱いて外へ出た。

私は人の視線を避け、下を向いていた。

「小学校五年でしたなあ、ちゃんと言うたあります」

自分のことが話題になっているらしかった。

「家は空き家になって一年ちよつとやし、プロパンもいれておきましたから、すぐに住める思います。

まあ、町のようなわけにはいきませんやろが」

「何から何まで世話になって」

話はそれから仕事の方に移っていった。

職員の一人が女の人の名を呼んだ。

「ジュースかなんかあったやろ。ボクに出したって」

暫くして女の人がジュースを持ってきてくれた。

「有難う、言いなさい」

奥から、父の声がした。

私はピヨコンと頭を下げた。

「礼儀知らずで」

父が恐縮した。

「いや、いや、子供さんも大変や。せやけど、すぐ馴れはりますわ。大人なんかよりずっと順応性が強いよって。うちの坊主も同じ五年生やし。それに、塩崎さんの息子さんも五年生や」

「塩崎さん？」

「京都から、あんたと同じようにきたはる人や、今日は京都に帰ったはるが、晩に挨拶に行く言うてました」

私はジュースを呑み干すと、空瓶を何処に置いていいのかわからず、持ったまま、そつと、外に出た。

母は桜の木の下に腰を下ろしていた。

「まだ、お話終わらないの？」

保子を重そうに抱きながら母は言った。

山の端に日が落ちていく。鼠色の雲が光り、空も山も、薄い墨の粒子に少しずつ染まり始めていた。

私はこんな所にいる自分が不思議だった。気持が不安定で、自分が自分でないような気がした。

「おなか、すかない？」

母が私の顔を覗き込んだ。

私は首を振った。

「もらったの？」

ジュースの瓶を見て母は言った。

「有難う言った？」

私は黙って桜の木を見上げた。

光の薄くなった空の下で、小さな白い花びらがいくつも重なってぼんやりと目に映った。

二 川の音

帰路につく役場の人達の一番後から、田島さんと父が姿を見せた。

「おそうなってしもて、奥さんすまんことで。寒うなかつたかいな。中で休んでもらうように何回もいうたんやが」

父の方をチラリと見て田島さんは言った。

「私が来るまで、助役さんに県の仕事をやってもろてたんや。えらい世話をかけてしもうて」

「わしは明日おらしませんね。せやなかつたら引き継ぎはゆっくりでよかつたんやけど。疲れたはるとこをえらい時間とらしてしもて。家までは歩いて、

しれたあるけど、荷物が多いよって、ちよっと、車を回してきます」 田島さんの姿が消えると、母は、父の耳もとで、そつと囁いた。

「晩ご飯、どうしましょ。あなたは鮎屋で食べる言うたはりましたけど」

「塩崎さん、京都から、わしと同じ仕事で来たはる人らしいけど、その人に助役さんが弁当を持ってくるように頼んでくれはったんや。一時間程前から、もう、きたはるかもわからへん」

「弁当？」

「その人は鮎屋の離れに間借りしたはるらしい」

父の横に大きな自家用車が止まった。町でもあまり見かけない立派な車だった。中から顔を覗かせ、田島さんが乗るように促した。

車は、真っ暗な街道を少し走り、右にカーブを切った。

「着いた」

父が母に言った。

その時、私はヘッドライトに浮かび上がった大小の二つの影を見た。

大きな影は、田島さんにお辞儀をし、小さな影は明かりに背を向けていた。

「塩崎はん、柵を開けてくれはりますか」

田島さんが窓から首を出して大声で言った。

大きな影は少しまごつきながら、背の低い柵を押しはじめた。田島さんはエンジンをふかし、車を乗り入れた。

「今日は闇夜やなあ、ちよつと、車を回しますわ」

田島さんがハンドルを左右に大きく動かし、車を反転させると、目の高さには、ぼんやりと屋根が見えた。

「くろうて、あぶない、あんた、家の電気つけてきて」

田島さんが父に言った。

「はい」と、父は返事をして車から降り、ライトに照らされた道を歩きだした。家への道は下り、父の背中が沈むように消えて暫くすると、提灯に火が入ったように明かりが点き、古い農家の屋根が照らし出され、こぼれた明かりが、背景の木々を墨絵のようになりに浮かび上がらせた。そして、それまで気づかな

かった川の音が聞こえ始めた。

三 白い少年

「こちらから挨拶に伺わなあきませんのに」

荷物を取りに車に戻った父は、塩崎さんに丁寧に
お辞儀をした。

いつの間にか小さな影は私の視界から消えていた。

「暗いよって気いつけや」

一歩一歩を確かめるように坂を下る私の背後から、
父が何度も声をかけた。

重い引戸を開け、高い敷居を越えると、土間を隔
てて左に幅二尺程の框があり、一段上がって奥が座
敷になっていた。

二間続きの奥の部屋に保子を寝かせると母は、

「お茶いれます」

と、田島さんの顔を伺った。

「ああ、台所は土間の奥にあるんや。使こうてへん
古い竈があったりして、使い勝手が悪いやろけど、
辛抱してや。プロパンの説明もせなあかんし」

田島さんが立ちあがり、母は後ろに続いた。

「来はんの、こころまちにしてましてん」

塩崎さんが言った。

「私達も心丈夫です。なんやかやと教えてもらわな
いかんし」

「いや、わしらもまだ、二週間経ったところですし、
お互いよそのものやし、なかようさしてもらおとおも
てますね」

塩崎さんは弁当の包みをといた。

「鮎屋いうて、道路の向こうの旅館の離れに間借り
してますね。そこで、作ってもらいましてん。田舎
料理で口にあわしまへんやろけど」

「いや、いや、助かりました。こんな遅うなると思
うてしませんでしたので。なんの用意もしてへんの
で、どうしよう思うてたところで」

父が言った。

塩崎さんは小柄な大人しい感じの人で、父より、
少し若く見えた。相手の顔を見ずにうつむきかげん
でボソボソと喋った。

田島さんが座敷に上がってきて、母がお茶を運ん

できた。

「あなた、田島さんの奥さんに、きれいに掃除して
もううたそうで」

「ほんとに、すみませんでした。おかげで、今夜か
ら、家族みんな気持よう寝やしてもらえます。正則
もおじさんにお礼言い」

私と母は父に合わせて頭を下げた。

「そんな礼言われる程のことしてへん」

田島さんは顔の前で手を振り、大きく笑った。

「ほんなら、わしらは引きあげよか」

田島さんが塩崎さんを見て言った。

「もつとゆつくりして下さい」

母が言った。

「今日は疲れたはるやるから、帰りますわ。そのう
ち、いやちゆうほどお邪魔しますよって」

田島さんは塩崎さんを促して立ち上がった

その時私の目の隅で小さな影が動いた。

そして、その影は大人達の背後に音もなく隠れた。

塩崎さんだけが、その気配に気づいた。

「道夫、挨拶しよし」

塩崎さんが体を斜めにする、土間に少年が立っていた。私と同学年とは思えない程小さな少年だった。それよりも家族が一瞬声を失ったのは、少年の透き通るような顔の白さだった。

「このぼっちゃんとおない年や、仲ようしてもらいや」

塩崎さんは、また彼の陰に隠れた少年に言った。

私と道夫との最初の出会いだった。

四 古い柱時計

他人がいなくなると、家族は一つ明かりの下に頭を寄せて暫くぼんやりとしていた。今日初めて何もしない時間を持った。そして、それぞれが家の様子を落ち着いて見ることが出来た。

家は単純な構造をしていた。二間の部屋の両側に廊下がついていて、右側は二部屋に続き、左側は奥の部屋だけについていた。左側の廊下の奥に便所と、風呂があった。両方とも廊下を隔てて雨戸が閉まっている。

「晩に着いたら、周りの様子がなにもわからんなあ」

父はそう言って、弁当に手を伸ばした。母が冷めた茶を三つの碗に注いだ。急に私は激しい空腹を感じた。

「あの時計動くんかいな？」

箸を止めて、父は上目遣いに廊下と部屋を隔てている鴨居の上を見た。私と母は気づかずになっていたが、古い柱時計が掛かっていた。

父は、小さな文机にのり、ネジを巻き、時間を合わせた。長針を一回転さす度に、空気を震わせ、時計は、ポーン、ポーンと鳴った。

「動くやないか。鳴る数もこれで合うたし」

父は、手をはたきながら、机から降りた。

振子が、物音の絶えていた居間で時を刻み始めた。

川の音が耳について、なかなか寝つけなかった。

川はどこを流れているのだろうか？ その音が気味悪く、私は心細くなった。すでに、父母は寝息をたてている。闇の中に目を凝らし、早く夜が明ければいいのにと、繰り返し思った。

雨戸を開ける音と同時に差し込む陽光に目が醒めた。

廊下の向こうに狭い庭がある。その端から急な斜面が、石を敷き詰めたような河原に落ちていた。斜面には、細い背の低い雑木が無秩序に根を張り、雑草が土を隠していた。川は中洲で分断され、二つの流れになっている。釣り人が一人、中洲を移動している。中洲が背の高い草に覆われているのは、彼が時々草のなかに見え隠れするので分かった。川向こうは山だ。

「杉山や」

父が、タオルを手渡しながら私に言った。竹の筒から落ちてくる湧き水で顔を洗っていた私は濡れた顔を挙げた。

「ほら、あそこに切り出した杉が並べてある。あの山には熊がでると、田島さんが言っていた」

山腹を透きとおるような薄い雲が走る。私は、杉の苗木の間に、熊が動かないかと目を凝らした。

「正則、川に降りるときはこの斜面はあかんで。坂が急やし、あぶない。街道に出れば降りる道がある。

それと、川に降りる時は長靴を履くのを忘れんようにな。蝮がおるらしい。村でも毎年二、三人は咬まれるいうことや」

朝日の中で動いていると徐々に自分の居る場所が分かってくる。車が着いた場所は、荒れた畑地で、家はそこから石を並べた坂を下り、川に向って建っていた。裏には小高い盛り土があり、雑多な灌木が植わっていた。花をつける木が多いらしい。白い小さな花が、十円玉ほどの大きさに固まり、点々と咲いていたり、堅い蕾をつけた木もあった。

「飯は竈でたいたんか？」

「まさか、使いもんになりませんよ。それに、使えたととしても、私には無理です」

「米が旨いのか、ご飯がおいしい」

「お米は家から持ってきたのを使いました」

「それなら、空気が旨いからや」

日ごろ食の細い父がご飯のおかわりをした。

缶詰を開けての朝食だが、確かに父の言うように

ご飯がおいしかった。

「それより、台所が低くって、腰が痛うて」

「まあ、徐々に改良していけばいいさ」

「人様の家ですから、それも」

父は少し言葉に詰まってから、

「それじゃ、田島さんに断ってからするようによ
よ」

と、言った。

「正則は二、三日、お母さんを手伝うてやってくれ。

荷物の整理や、買い物なんかでたいへんやろから。

来週から学校に行くようにしたらええ」

「あなた、今日から、仕事ですか？」

「初めが大事や。落ち着いたら、休んで家のことする
ようにするから、大きな仕事は残しといて」

そして、茶を啜りながら、

「どっちみち、ずっとこの村に住むわけやないし、

一日、一日を上手に過ごしたらええんや」

と、言った。

「午前中だけでも駄目ですか？」

母が訴えるように言った。

父は黙って腕時計に目を落とした。そして、宙に目をさ迷わせ、役場までの時間を計算した。

父は立ち上がり、ネクタイを締めた。

柵の所まで見送りに出た母は、街道を曲がり、父の姿が消えると、私に話すというふうでもなく、眩いた。

「小役人や」

母が父を非難したのを、この時以外に私は聞いたことがない。その時、何故か私は父と母を哀れに思った。

今でも、家族を掌に乗せているように感じる時、掌の持ち主である自分にも、乗っている家族にも、自分が父であることが良かったのかと思う時、その時の光景がしばしば重なる。

五 葵

暫く、母と私は柵の前でぼんやりとしていた。途方に暮れていたといってもよかった。

町では、家を一步でると生活の匂いがあった。しかし、ここにはない。あるのは二人に覆いかぶさってくるような自然だけだった。

田島さんの奥さんがやってきた。大柄なよく肥った、気さくな人だった。母と直ぐに打ち解けて、なにかのと手伝いをしてくれた。箆箆に服を入れながら、二人は大笑いしたりした。私は、その光景をみながら、父のかわりにほっとした。

私は小さな文机に、教科書や遊び道具を片付けた。それが、終わると、風呂場の水洗いをした。五右衛門風呂で、奥さんが、丸い板を沈めて入るのだと教えてくれた。

「薪はな、暫くはうちのをつこたらええ。あとは、ぼくの仕事やで。河原でひろてもええし、こなへんの木を切って乾かしてもええ」

「ほな、これ終わったら、捜す」

「落ち葉もひろときや。火種にいるけん」

「お茶入りましたから、奥さんどうぞ」

居間から母の、弾んだ声がした。

「ここで、結構、結構」

と、座敷にと勧める母に言って、奥さんは廊下にとっかかりと腰を下ろした。私もその脇に腰をかけ、踏石に届かない足をぶらつかせた。

「築山もえらい荒れてしもて」

お茶を啜りながら奥さんは言った。

「ぼく、ちよつと、おいで」

湯のみを置いて、奥さんは私を手招きしながら立ち上がった。

「これは木蓮や。数は少けないけど、ツボミが膨らみ始めとる。もう、ふんわりと、ええ匂いがしてる。白い花がパーと咲いたら、座敷にいても花のにおいがするわ」

「これはなんていう花？」

私は白い花を指差した。小さな花の固まりが、細かい枝に点々と咲いている。

「小手鞠や。まあ、よう咲いて」

奥さんは、日にやけた手をそつと枝に添えた。枝はしなり、花は揺れた。

「これは、ナンテンの木、冬になると、赤い実をひよどりが食べにくるよ。これはくちなしやわ。ほん

まに色々とう植えたある。山が嫌いな旦那やっ
たけど、奥さんはそうでもなかったんやなあ」

築山に沿って歩きながら話していた奥さんが、急
にしゃがみこみ、

「ぼく、この葉っぱ見てみ、おもしろい形してるや
ろ」

と、築山の一番下の斜面を指差した。ハート型の
薄青の葉が斜面を覆っていた。

「家紋みたいやろ。珍しいやんで、なかなかあらへ
ん。あおいや、葵の御紋や」

私もしゃがみこんだ。奇妙な形の葉っぱの上に、
二人の薄い影がほのかに流れた。

昼食をとり一旦家に帰った奥さんが乳母車を押
しながらやってきた。母は取り敢えず必要な日用品
を便箋に書き出しているところだった。

「これなあ、蔵から出してきたんや。うちにはもう
つかうもんおらへんし、よかったら使うてもらお思
うて」

奥さんは乳母車を座敷の母に見せた。

「おおきに、たすかります。保子も重とうなったさ

かい」

縁側にかけより母は言った。

奥さんは縁に腰を下ろし、母との間に便箋を置いて、なんのかのと話始めた。

私は築山の縁につくぼり、葵を見ていた。双葉の間に淡くて明るい紫色の小さな花が下向きに、両手のように開いた葉に遠慮するように咲いている。指で触れると小さく揺れた。指先に、今まで知らずにいた小さな命の息のようなものが、そつとかかるような気がした。保子が泣いた。母が座敷にかけよる気配。ふっと、抜けるような静寂に、川の音が急に聞こえだし、葵の薄い緑に清流が一筋の光のように流れるのを私は見た。

六 獅子谷

「正則、ちょっと、おばさんと鮎屋まで、買い物に行くよって、留守番しといて」

「鮎屋？」

「鮎屋は旅館もやってるし、雑貨も置いてるや。夜

は、土間で飲屋もしとる。なんでも屋やね。それになあ、このへんで一番の山もちなんやで」

奥さんは、私と母の顔を交互に見て言った。

「どのくらいかかる？」

「そんなにかからへん」

保子を乳母車に乗せながら、母は言った。

「熊がきたら、ようおこし言うんやで」

「奥さん、気の小さい子やから、怖がりますかな」

「ぼくも、行く」

「ほら、あんのじょうや」

奥さんと母は顔を合わせて笑った。

「ほな、ぼんも行こうか」

奥さんは、手を私の頭に置いて、言った。私は、

その手から逃れて、

「やっぱり、留守番する」

と、怒ったように言った。

坂道をあがり、二人の姿が消えても、話声は、暫

く聞こえていた。

縁側に腰を下ろし、踏石をむやみやたらに爪先で蹴りながら、後を追いたい気持ちをじっと押さえ、

川を見ていた。

そして、僅かな物音にも怯えた。

笑われても付いて行けばよかったと、何度も後悔した。

じっとしていれば、時間が経つのが遅い。息の数だけしか進まない。腰を上げ、家のまわりを、ぶらぶらと歩き始めた。木に巻きついた蔓が蛇に見えて、息を呑んだ。突然飛びたつ山鳩の音に足を竦めた。

家の周りを一巡した時、奥さんが言っていた薪の事を思い出した。大人に褒めてもらいたい為に、薪を拾おうと思った。小さな枝を拾い、これじゃ間にあわないと、細い雑木の枝を引っ張ったが、枝はしなるだけだった。思い直して、地面に落ちている小枝をこまめに拾い始めた。その時、頭の上の光が、ふっと変化した気がした。顔をあげると、坂の上に立っていた少年は一步あとずさりした。

「なにをしてるんや？」

少年は言った。私は立ち上がり、少年を見た。彼は、体の重心を絶えず後ろに引きぎみに、また、同じ事を言った。

「なにをしてるんや？」

彼は、両拳をしっかりと握って、私を見下ろしていた。

「薪を捨てんのや」

「薪？ それやったら、河原になんぼでもある」

彼は私を見据えながら、用心深い猫のように、ゆっくりと坂を降りてきた。私を見据える彼の眼は兎のように赤く、歩く度に金色の細い髪の毛が風にそよぐように流れた。昨夜、塩崎さんの背後にそっと隠れた白い顔は、陽光の下で、まるで別人のように見えたが、素早く、しかし、慎重に歩を進める彼の姿は、一瞬に、私の目の中に昨夜と同一の像を結んでいた。

「河原に連れられたるか？」

私は、つくぼったまま目を落とし、近づいてくる道夫の所々泥で汚れた白い足と、その下でかすかに揺れる小さな黒い影を見ていた。

「うどん粉の中から生まれたんや」

顔を見上げる私に、口元に笑みを浮かべながら、表情を探るような真剣な目差と、いつでも後ろに逃

げられる距離と身構えを取りながら道夫は言った。

「この斜面から降りたら、すぐや」

「あぶないよって、あそこから降りたらあかんいわれてる」

「ほんなら、街道へ出たらええ。そんなにかからへん。俺は魚を捕まえるから、おまえは薪をひろたらええ」

街道沿いに道夫の後を歩いた。彼は、時々、立ち止まり、私を確認すると、また歩きだした。暫くその繰り返しで歩くと、彼は急に歩を止めて私を待った。

「あそこが、獅子谷の入り口や」

彼が、街道越しに指差した場所は、なんの変哲もない街道に通じる山道に思えた。道は下っているらしく、その先は見えない。

「あの道を谷川沿いに行くと、橋があるんや。その先は村の子供もよう入りよらん。ものすごい深い谷や。何人も入ったまま出てこん人がおるらしいわ。せやけど、俺は何遍も行った。大きな狐も見た。おまえ、コリーて、知ってるか？」

「知ってる。でかい犬や」

私は目を輝かせた。彼は、思い切り両手を広げた。「その犬より大きい。この倍はあったで。そいつが岩の上で、振り返るように俺を見とったんや。金色の毛してた。動物園の狐なんかと全然ちやう。ものすごく綺麗やった。それに、尾っぽが、ものすごく太うて長いんや。こんくらいの太さで、この位の長さや」

彼は、両手で大きな輪をつくり、また、思い切り両手を広げた。

「熊も見たか？」

私は意気込んで聞いた。

「熊か？」

彼は少し口籠った後、

「熊は、あっちの山や」

と、川の方こうを指差し、

「獅子谷にはおらへん。獅子谷は狐や狸、猿、りす、人を襲うようなんはおらへん。道にまよて、出られんようになって、死ぬのが怖いだけや」

彼は遠くを見る目をして言った。

いつの間にか私は彼と肩を並べて歩いていた。

七 山の底

思ったより、川への道は細く、急な勾配だった。雑草を踏み、枝が顔にあたるのをよけながら、必死に道夫の後に続いた。彼もおっかなびつくりで降りているのが分かる。しかし、

「ここは滑るぞ」

とか、

「枝を掴んで降りろ」

とか、私に声をかける。少し遅れると、立ち止まり、

「ゆつくり、ゆつくり」

と、両手で自分の膝を押さえる仕草をする。

彼は、この道を降りた時の怖さを、私の姿に重ねていたのだろう。彼は、その時は一人で降りたのだと思う。半月前の自分が、後ろから、へっぴり腰で降りてくる。

「蝮、おらんか？」

長靴を履いていないことに気づいて、私は、彼の頭の上から声をかけた。

「大丈夫じゃ、賑やかして、俺が先に歩いてる」
うっすらと上気した顔を私に向けて、彼は怒鳴った。

道幅が少し広まり、勾配も緩やかになった。やつと、背筋を伸ばした私の目の前に川が見えた。ドドドーと川床を叩くような音の中にいて、その音が少しも気にならない。静かだ。只、水の音だけの世界に包まれている。

二人は一気に斜面を駆け降りた。

魚を捕ると言っていた道夫は、その事を忘れたように、私と河原の流木を拾った。大きな木も河原に打ち上げられていた。枝を曲げると、簡単に折れた。「すごいなあ、水はこんな大きな木も運びよるんやなあ」

道夫が言った。

「生えてる木はなかなか折れんが、太うてもこれは簡単に折れる」

と、私が言うと、

「死んどるからや」

と、彼は言った。

次々に小魚が水面で跳ねた。一瞬の飛翔に、小さなしぶきがたった。

水辺に走り、腹這いになって水を飲んだ。

「水がこんなに旨いなんて、ここに来るまで、知らんだ」

光る水滴を口の周りにつけて、川の音に負けないぐらいに道夫は叫んだ。

大きな岩に腰を掛けて、二人は空を見上げた。鳶がゆっくりと旋回している。目の届く限り、山と空だけだった。

「山の底にいるような気がするなあ」

道夫が言った。

山の底。私もそんな気がした。

ぼんやりと、目をさ迷わせていると、意識が透明になり、水の流れや、山や、空に、すっと溶けていく。

「こんな話、おもしろないか？」

「どんな話？」

「ここに俺が坐っているのに、誰にも見えへんいう話や。誰かが来て、腰掛けようとしても、なんか尻がこそばい気がして坐るのんやめる。せやけど、ある時、きれいな女の人がかかるんや」

そうやって、道夫は、照れ臭そうに足元の石を蹴った。

「その時、小さい鳥が俺の肩にとまるんや。鳥は空中にとまってるように見える。羽ばたきせんと、浮かんでる。女の人は、びっくりして、そこに、誰かいるの？ って、聞かはる……」

道夫の透き通った声が途切れた。

「それで？」

待ちかねて、私は言った。

「それだけや、薪も集まったし、帰ろか」

道夫は立ち上がった。

「薪を持ってよう上がらんわ」

「大丈夫や、滑らんように、一足ずつゆっくり上がったらええ」

彼が言ったように上がるのはたいした事ではなかった。人が踏みしめた所が分かる。

「振り返ったたらあかんで、怖い思うよって」

後ろから道夫が言った。

「魚釣る時は、竿とびくを両手に持って、水こぼさ
んように上がるんやし」

「蝮おらんか？」

と言いかけて、言葉をのんだ。彼が後ろから私を、
見守ってくれているのが分かっていたからだ。

「今日は学校はないんか？」

表の縁に並んで腰をかけ、私は尋ねた。

「腹が痛んだから、休んだ」

道夫はそっけなく答えた。

「学校はどんなんや？」

「田舎もんばかりでおもしろくない。それにこの村の
がき等どもはみんな、根性悪や。おまえ明日から行
くんか？」

「来週からや」

「街道沿いに行くと、遠道になるからいうて、山の
中を通って行くんや。初めの頃は、直ぐに走ったり、
隠れたりして、意地悪しよった。今は、俺の姿が見
えたら、一、二の三で、先に山の中へ走り出しよる。」

いやな奴ばっかりや」

道夫は遠くの山に目をやりながら、吐き捨てた。

山嶺に日あたり、明暗が帯状に長く伸びている。

しかし、太陽の在処は分からない。

「ほな、俺、帰るわ」

道夫は立ち上がった。

私も、腰をあげようとした時、母と奥さんの声が

遠くで聞こえた。

「月曜日、さそいにきたる」

道夫は早口に言うと、あつという間に、私の前から消えた。

八 家族

父が帰ってきた。

上がり框に腰を下ろし、ゆっくりと靴を脱ぎながら、

「暗いなあ」

と、言った。

土間には小さな裸電球が一つぶら下がっている。

二つの部屋の電球も小さく、ぼんやりとしていた。

畳に赤味がかかり、人の影が、様々な形や濃淡をつくって流れた。

「蛍光灯にかえましょか？」

母が言った。

「いいや、この家に蛍光灯はかえって妙や。百ワツトにして、傘つけたほうがええ」

私は、父と母の影を見ていた。上着を脱ぐ父と、それを受け取る母の影が二人の輪郭を二重に映して、すーと畳の上に流れるかと思うと、ハンガーに服を吊るす母と卓袱台に向かう父の影が、押し入れの襖に急に立ち上がり、やがて、それ等は小さく蹲り、畳の影は、人を乗せる盆のようにそれぞれの膝もとに収束した。

「テレビがいるな」

父は煙草に火をつけながら言った。

「共同アンテナまで線をひかな映らんらしいです」

「だれが言うてた？」

「田島さんの奥さんです。費用が結構かかるって」

「わしらに金がない思うて、そんな言い方するんち

がうか？」

「そんなことありません。奥さんはええ人ですよ。今日も一日なんやかやと手伝うてくれはったし」

二つの影は動かない。

家族が小さな影になっているのが面白かった。影が動き、喋るのを見ていると、生きていることが何故か嘘のように思えてくる。同時に、町での生活が遠い昔のことのような気がした。

家族が黙ると、カチカチと柱時計の音が過ぎ去って行く時を刻む。

なにもかもが大きな嘘なのかもしれないと、私はぼんやりと思った。

「テレビはがまんするか」

父は灰皿に煙草を、にじりつけながら私を見た。

「正則、風呂はいるぞ。一緒に入るんやったら、はよう用意せんか」

「こうやって、板を浮かして、ゆっくりと、足で沈めるんや」

風呂釜のへりに尻を乗せて、バランスをとりなが

ら足を沈めていった。

「なかなか、うまいやないか」

父が体を擦りながら言った。

「田島のおばさんに教えてもらたんや」

私は得意になって、言った。

眼鏡を外した父の目が、優しそうに笑っている。

「焚きましょか？」

外で母の声がした。

「そうしてもらおか。水がすけないよって。正則、水を少しずついれや。それに、えらい湯気や、窓をちよつと開けて」

小さな窓を、背伸びして少し開けた。

小さな空に、澄んだ光を放つ星がいくつも数えられた。

「やっぱり、正則の捨てきた薪は湿ってて、よう燃えんわ」

母の言葉と一緒に煙が窓に上がってきた。

「正則が？」

「川原で捨てきたさかい」

父の声に母が答える。

「川へ行ったんか？」

父が私の背中を擦りながら聞いた。

私は頷いた。

「一人で行ったんか？」

「道夫君と一緒にや」

「道夫君って？」

「塩崎さんの息子さんです」

母が言った。

「おまえが行かしたんか？」

「いいえ、奥さんと、鮎屋に行ってる間に」

「そんなことして、行き違いにでもなったら、かあ

さんが心配するやないか」

父が私の背中に湯をかけた。

「道夫君、よう学校を休むらしいよ。田島さんの奥

さんが言うたはった。村の子によう馴染まんらしい

です」

父はタオルを私に渡し、湯船に入った。

「塩崎さんの奥さんは？」

母が言った。

「ようしらん、せやけど、村にいてへんのは確かや。

それと、一月に一回……。昨日は何曜日や？」

「木曜日です」

「木曜日に休暇とらはるらしい。子供と京都へいかはるらしい。それは出納の女の子から聞いた。昨日きて、今日や、他はなんにも分からへん」

私は泡のでないタオルで体を擦った。

「まあ、とにかく、塩崎さんはええ人みたいや。それに、ここでおうたんも、何かの巡り合わせや。親方違ても、おんなじような仕事やし、わしらとおんなじような境遇や。似たもんどうし、仲ようせなしやないやろ」

「そうですけど、道夫君のことあんまりええ話聞かんですわ」

「田島さんの奥さんが言うてるだけやろ？」

「いいや、鮎屋でも噂になってました。村の人もあるまり行かへん谷の奥に入って行くとか、嘘をようつくとか」

父は湯船につかり、目を閉じていた。母の話を知っているようにも、聞いていないようにも見えた。

私は、そっと逃げるように風呂場を出た。得意顔

で板を沈めていた時の気分が跡形もなく消えていくのが分かった。

また、川の音が聞こえはじめた。

九 学校

「馴れんことはするもんやないなあ」

父は、布団の中で、煙草の煙を吹き出しながら言
った。

「あつちや、こつちやが痛い」

日曜日に、半日ばかりで、荒れた畑地の畳二枚程
を堀かえし、母が田島さんの奥さんから貰った野菜
の種を植えた。胡瓜、トマト、獅子唐、葱。昼から
は田島さんと奥さんもやってきて、なんのかのと賑
やかに話し合い、父は、もう畳一枚程堀かえさなけ
ればならない羽目になった。

私は、水を運んだり、雑草を抜いたりして、父を
手伝った。奥さんは、畝を作り、種を蒔く間隔を母
に指示したり、こまめに動き回っていた。田島さん
はなんのかのと言いながら、突っ立ったまま喋って

ばかりいた。

畑仕事が終わりに、田島さん夫婦も帰ると、私の心の中に、明日への不安が、少しずつ重くなっていった。そして、次の日がやって来た。

転校への不安は計り知れないものだった。道夫を知っているという事は安心にも、不安にもなった。

「もういいの？」

ご飯のおかわりをしない私に母は聞いた。私は黙って頷いた。学校への道中、腹が痛み、便所に行きたくなるのを恐れた。遠足等の団体行動の時、絶えず腹具合を気にしている少年だった。

私は、道夫が迎に来ることを父母に言っていないかった。引き戸を開ける道夫を心待ちにしながら、彼を見る父母の目を恐れた。

役場のバス停留所に集まり、山の中を歩いて学校へ行く。行きも帰りも村の子供達と一緒にだった。

「子供も大変や。今までは、学校が家からも見える所にあつたのに」

母が言った。

「まあ、足を鍛えたらええわ。正則も丈夫になるや

ろ」

父が言った。

柱時計が七時を打った。

耳を澄ましても、道夫のやってくる気配はなかった。

「停留所までついて行きます。保子がおるよって、学校までよう行かんし。直ぐに帰ってきます」

「時間があつたら、昼休みにでも、わしが行って、挨拶してくる」

父が言った。

「みんなと仲ようするんやで。田島さんとこの子が五年生で一番上級生やて、あんたと同じや。お母さんがおばちゃんにようたのんどいたから、大丈夫や」

街道に出ると、母は言った。

その時、

私の目の隅を、道夫が過った。

そして、道端の木の陰に一瞬にして消えた。私の足は止まらなかった。

嘘つき、のけもの、母の声が頭の中で聞こえた。

彼の仲間になりたくないという気持が、ただ足元だけをみつめる目になった。彼に気づいていないのだと、自分に言ってきた。このまま行けば、自分が村の子にいじめられても、その時は彼が助けられる。それからでも、彼に気づくのは遅くない。彼の好意は自分が不利な時にだけ働けばいい。

大人達の目にも、彼と仲よくするのは、よくはうつらないだろう。私は自分の安全と、大人たちが自分をみる目だけを考えていた。

川の音が消えた。聞こうと思っても聞こえない。村の子供達は、好んで話かけてくるのではないが、敵意を持ったり、のけものにするという感じもなかった。

村の子供は三人で、田島さんの息子のヨツちゃん
と鮎屋の四年生と三年生の兄妹だった。兄はおつとりとしていたが、妹は体は小さいが、すぐに走りだす、両頬を真っ赤にした元気な子だった。

初めて歩く道は長く感じられた。腹の具合を気にしながら、彼等に遅れないように歩いた。木洩日が光の細かい雨のように降りかかる径を、湿った落ち葉

を踏みながら歩いた。

時々後ろで、カサカサと音がする。道夫がついてきているのか、小さな動物が動く音のなのかわからない。

突然、坂の上にポツカリと穴が開いたように空が見えた。

峠に立つと、急に視界が広がった。

「あれが、学校や」

ヨツちゃんが指を差す。

田圃に囲まれた、古い木造の校舎が見えた。畔道を列をなして学校に向かう子供達の姿も見える。鮎屋の妹が坂道を転がるように走った。山の中で後ろを見ることのなかった私は、坂を下りきると、峠を振り返った。道夫の姿はなかった。暫く目を凝らしていると、

「おーい」

と、ヨツちゃんが私を呼ぶ声が聞こえてきた。

十 余所者

長い夢の途中で眼が醒めた。

暫く、天井を見つめていると、ボーン、ボーンと柱時計が十回、震えるように鳴った。

部屋の隅で眠る保子の黒い小さな頭だけが欄間から洩れる明かりで見えた。

引戸を開ける音がして、父が帰った気配がした。

「おかえりなさい」

「田舎の人はよう呑む。それに、えらいめにおうた」

居間に父が上がり、母が土間に下りたようだ。

「正則は寝たのか？」

「疲れたんでしょう、八時に寝ました」

襖を少し開ける気配に、私は眼を閉じた。

「二人ともよう寝てる」

「子供なりに気疲れしたんでしょう。それに、山道を三十分も歩いたし」

「暇なかったから、学校へは行けんだ」

「明日でも、昼間に私が行つとききます。心配せんでも、仲ようしてもろてるみたいですよ。元気に帰ってきましたさかい」

「そうか、それはよかった。まあ、もう五年生やし、それに男の子や」

「なにか食べはりますか？」

「いや、もうええ、せんどよばれたさかい。それよ
り、水、もう一杯もらおか」

母が、また、土間に下りた。

「えらい遅いよって、お仕事が忙しいやろ思うてま
したのに、宴会ですか」

「わしと塩崎さんの歓迎会や、田島さんが音頭とつ
てなあ、鮎屋で」

「さつき言うたはったえらいめって？」

「塩崎さんが暴れたんや」

「暴れた？　なんで？」

「酒乱やなあれは。機嫌よう呑んでたのに、急に変
な事言い出して」

「あの大人しい感じの人がですか？」

「村のもんは、わしらを差別しとるとか、Mさんは
来るなり歓迎会、わしはつまみやとか。まあ、その
あたりまでは、酒の上のことやと、皆笑うてたんや
けど、それから田島さんにひどう絡んで」

父は一息ついて、水を飲む気配がした。

「田島さんに、あなたの息子は、学校でうちの子を白墨いうていじめてる言い出したんや。そして、俺らになんか恨みがあるんか言うなり、膳をひっくり返しよった。後はメチャクチャや」

「信じられへんなあ、あの人が」

「しゃないから、塩崎さんを、わしが外へ連れ出したんや。すまない、すまない、言うて、今度は声あげて泣くんや。そこで、聞かんでもええ話聞いてしもうた」

暫く間をあけて、

「一本つけてくれるか、なんや、酒醒めてもうて、寒うなってきた」

と、父が言った。

「一月に一回、休暇をとるのは、息子をK大の付属病院に連れて行く為や」

「病気？」

「滅多にない病気らしい」

「道夫君、知っているの？」

「言うわけないやろ。皮膚が白いのをなおしてもろ

てる思うてる」

「なおらんの？」

「今の医学ではな。しかし、一日生きたら一日医学も進むんや、そう、言うたら、おおきに、おおきに、また泣かれた」

また、母の土間に下りる気配がした。

「ほお、鮎か？」

「小鮎の佃煮です。鮎屋で買いましたん。安うて、おいしい言わはるさかい」

「なかなか旨い。そういうたら、この川は鮎釣りの本場や。夏になったら友釣りでもするか」

母が卓袱台を片付ける音、そして夜具をひく音。

私の枕の下を流れる川の音。父の咳ばらいが一つ聞こえ、欄間から洩れる明かりが消えた。

父と母が、闇の中で動く気配がする。

「明日、早いし」

母の小さな声の語尾がかすれた。

私は、枕に耳を強く押し当て、川の音だけを聞こうと思った。

父は家で時々不機嫌になった。トンネルの現場に行った日は、――あの様子じゃ、俺は定年まで、この村で飼殺じゃ――と、嘆いた。日曜日の昼下がりに、木蓮のにおいが嫌だと、根っこから抜いてしまった。村の人に、大人しい人格者だと思われている分を、家族に遠慮しながら当たった。父は夕食が終わると、時々、思い出したように鮎屋に出掛けた。

一時間程経つと、私は父を迎えに行った。

いつも父は、塩崎さんと、椅子一つ間を開けて酒を呑んでいた。

私を見ると、

「よお、来たな、カアちゃんのまわしもの」と、言つて、頭をぐりぐり撫でる。

その様子に、村人は大笑いするが、塩崎さんは笑わなかった。

五月。

緑が一斉に濃くなった。淡い緑が、徐々に光を蓄え、その内部から光り始めた。

日々に山が近づいてくる。築山の葵は、小さな花

を落とし、葉は緑を深め、ひとまわり大きな円になった。

風に流される細かい雨が、霧のように、山肌を霞ませたかと思うと、単調な灰色の曇天が鋭利な刃物で一筋切り裂かれ、白い光の束が、地上に向かってかけ橋を伸ばす。

僅かな雨にも川の水は濁り、激しく流れた。

母が、竹で作った、格子状の添木に胡瓜の蔓がしつかりと巻きつき始めた。私の体も心も少しずつ村に馴染んできた。

十一 螢

六月。

細い雨が毎日のように降った。梅雨に入った。

「田島さんの奥さんが、ヨツちゃんは、今日は田植えの手伝いで休む言うてた。鮎屋の兄妹そろて風邪ひいて、休みやて。おまえも、休むか？」

母が言った。

「俺は、用もないし、風邪もひいてへん」

私は言った。

峠で、道夫が後ろから声をかけた。

「今日は一人か？」

振り返って、頷くと、彼は、カタカタとランドセルの音をたて、走り寄り、私と肩を並べた。

「なんで、村の子を嫌うんや？」

私が勇気を出して、聞くと、

「俺がきろてるんちゃう、あいつらが俺をきろとるんや」

道夫は、関心なさそうに早口で言った後、

「そんなことより、もの凄いもん見つけたんや」

と、言って、私の顔を覗きこんだ。

「何や？」

道夫は私の顔を見ながら、後ろ向きに歩いた。

「ホタル」

「ホタル？」

「ものすごういる。草叢で光るやつ、光りながら飛ぶやつ。昼みたいに明るいんや。本当や。絶対今日も出る。一緒に行こうや」

「何処や？」

私は足を止めた。

「獅子谷や」

「橋より奥か？」

「そうや」

私はまた歩き出した。

「行ったらあかんとこや。それに晩やろ、よけいあかんとこや」

「昨日見つけたんや。この前行った時は、なんにもおらへんだのに。今まであんな綺麗なもんは見たことあらへん」

「あかんいうたら、あかんのや」

私は坂を下りながら、夜店で買ってもらった螢を思い出していた。それは、小さな籠の中で光っていた。水をやらなければ死ぬと大人に言われて、両手を水で濡らし籠にふりかけた。草の上で丸くなった水滴に、たった二匹の螢は頭を寄せていた。真っ暗な路地の隅の地面に籠を置き、私は膝頭を抱えながら、小さな二つの明かりを見つめ、長い時間飽きることはなかった。

「何時に行くんや？」

校門の前で私は聞いた。

「七時にしよう。長靴も二つある。懐中電灯は大きいのを持ってるから、おまえは小さいのでええ。そのまま来たらええわ。谷の入り口で待ってる。嘘違う、ものすごい綺麗ねんから」

弾んだ声で道夫は、言った。そして、校舎に向かって、一気に駆け出した。

母は保子を寝かせている。

父は今夜も夕食が済むと早々に鮎屋に行った。卓袱台で、宿題をやりながら、私は何度も柱時計を見た。

「ヨツちゃんに給食持っていく」

「今ごろか？ もうじきに日が暮れるがな」

母が言った。

「忘れてたんや」

「ほんまに、昼間なんぼでも時間あったのに。ヨツちゃんも気の毒や」

私はランドセルからひしゃげたパンを抜き出した。

「帰りに鮎屋に寄って、お父さんと呼んできて」

私は頷いた。母は私の嘘に気づいていない。その

自然な様子が、私を後ろめたい気持ちにさせた。嘘がばれても、道夫のせいになれば、自分は良い子でおれる。事実、彼が誘ったことなんだ。家を出て、坂道を上がりながら、そんな事ばかりを考えている自分が嫌になった。しかし、堂々巡りに同じ事を考えてしまう。

坂の上で振り返ると、屋根は目の位置より下になる。家から赤い明かりが洩れていた。その明かりが、急に私から離れていく気がした。嘘について危険な場所に行くのは勇気ではない。教師ならそう言うだろう。螢を見たいのなら、もっと、他に方法があったろう。所詮、子供の行ける場所だ。俺と一緒に行ってもやれたのに。父はそう言うかもしれない。

私は、様々な情景を頭に浮かべながら歩いた。

ポツカリ開いた真っ暗な穴で明かりが点滅した。

「やっぱり、やめるわ」

私は穴に向かって言った。

「何でや？」

姿の見えない道夫の声が返ってきた。

「大人に連れてもうたほうがあええ。父さんに頼んで

みる」

「ホテルは明日はおらへんかもしれん。雨が降って行けんかもしれん」

「来年でもええ、ちゃんと、言うてからにする」

「今年のホテルは、今年だけや。十日しか生きてへんのや」

道夫は明かりをつけた。

闇の中に白い少年が浮かび上がった。

「おこられたら、俺のせいにしたらええんや」

「なんで、俺を誘うんや。一人で行ったらええやんか」

明かりが消え、無言が流れた。

そして、道夫が私から離れて行く気配がした。私は道夫の後を追うように闇の穴の中に飛び込んだ。

谷川に沿って歩いている筈だ。道夫が照らし出す径は、そのことさえも、不確かな感覚に導いた。

径の中央が窪み、水が三〇センチ程の丈の細い雑草の茎を浸している。雨水ではない。土中から、少しずつ染みだしている水だ。二人は、草を踏み、そこが径の真ん中だと確かめながら進んだ。村の人々

は、この谷の湧き水を飲んでいた。時々、光に浮かぶ路傍の竹筒はその為の水路だった。

橋を渡った。そこからは、足の踏み入れたことのない場所になる。

音も光もない闇の奥に入っていく。頭上は、雑木の葉に覆われているのか、森と空との境が分からない。

「星も、月も見えへん。明日も雨やなあ」

道夫が言った。

「まだか？」

私は聞いた。谷に入ってから、どのくらいの時間が経っているのだろうか。僅かな気もするし、思いのほか長い気もする。時間を計るものがなにもない。ただ闇が、続いている。私は、時間というものが分からなくなった。生まれて、育って、今の自分、その間にあったものが、抜け落ちているような気がした。

「もうすぐや、さっき渡った川にもう一遍出るんや。ほんで、川に下りて行くんや、気いつけてな」

山道は細くなり、急な下りになった。顔に枝や葉

があたるのをよけながら、窮屈な姿勢で歩いた。水の気配がする。川の流れる音が微かに聞こえているようだ。二人は背の高さよりも高い草叢に入った。道はなく、草を両手でかくようにして進んだ。

「見てみ、見てみ、草の中にいる」

道夫が叫んだ。

小さな光が、点々と息づきを繰り返すように点滅していた。

「川に出るぞ」

道夫の声とともに、視界が開け、闇のなかに無数の光の線を引く螢を見た。強く光り、弱く光り、光と光が交差し、また、溶けるように消える。川面に沈む光、川面から舞上がる光。光の線が束になり、光る帯になり、光る闇に変化する。

「生きてるんや、生きてる光や」

道夫が叫んだ。

二人とも光り、細い光路をひき、光る闇の中に吸い込まれていくように思えた。

夏休みに入ると、毎日、ヨツちゃんと鮎屋の兄妹が私を呼びに来た。そして、一日中、山や川で遊んだ。ヨツちゃんはカブトやクワガタのいる場所をよく知っていた。私は虫捕りに夢中になった。私が運よく捕まえた赤カブトは彼らの羨望の的になった。全体に透明な赤味がかかり、あまり大きくはないが、他のカブト虫にはない美しさを持っていた。

夕方になると、宝石を扱うように籠から出し、縁側で這わせて、眺めるのに飽きることはなかった。

「何処へ行くんや？」

昼飯の後、また集まった四人に、母が畑の中から声をかけた。

「川に行くんや」

私は答えた。

「鮎釣りしたはる人の邪魔すんのちゃうで、これ持っていき」

母は、笹に一杯のトマトを差し上げた。

「素人やのに、うまいことできた」

母は、額の汗をぬぐいながら、嬉しそうに笑った。

「ありがとう」

ヨツちゃんと兄妹が一つずつ策から取った。

「あんたには、珍しいないやろけど、お婆さんが、初めて上手に作れたんやさかい、我慢して食べてな」

妹の頭を撫でながら母は言った。

「川で冷やして食べよ」

ヨツちゃんが言った。

「流れんように石で囲うて、ここに冷やしとこ」

谷川が川に注いでいる場所をヨツちゃんが指差した。

「あれ塩崎ちがうか？」

石をつかんだ私の頭の上で、のんびりとした口調で修が言った。私とヨツちゃんは石を握ったまま立ち上がった。

中洲を隔てて、川の中の大きな石の上にいる道夫が見えた。日光が石に当たり、そこだけが日だまりのようになっていた。彼の方からは、川から少し入り込んだこの場所は見えないのだろう。

「何をしとるんやろ？」

ヨツちゃんが言った。

向こう岸の草叢を釣り竿が一本動いている。その竿が彼の背後を通りすぎたのを見計らったように、道夫はシャツを脱いだ。

「泳ぐんやろか？」

修がまた、おっとりとした口調で言った。

道夫の白い肌が、陽光に抱かれているように見えた。

「わしらも、後で泳ごうや」

ヨツちゃんが、腰を屈めながら言った。

「塩崎も一緒にいれたってもええか？」

不意に出た自分の言葉に、私は、はっとした。

「かまへん」

ヨツちゃんは即座に答えた。

「あれ、塩崎がおらんようになった」

修の言葉に、私は川に目を移した。

道夫の姿が消え、一本の釣り竿が激しく下流に向かって、動いている。川の音に混じって、意味の分からない男の叫び声があった。ヨツちゃんがトマトを投げ出し、走り出した。

その後を、兄妹が追った。呆然としている私の耳に、男の声が、今度ははっきりと聞こえた。

「子供が流された、……、子供が流された……」

ヨツちゃんの姿を求めて、私は走った。一人でいるのが怖かった。

*

戸板の前後を二人の男が持ち、ゆっくりと歩いてきた。そのそばを三、四人の男女が、歩調を揃えるように歩いた。川を隔てて、私達はその様子を見ていた。戸板に蕙がかかっていた。大人達の動きが、異常なほど、のろく感じられた。

まわりの風景が、小さな木の一本まで、迫って見えるのに、その光景だけが、遠くにあるように思えた。強い日差しの中なかで、小さくぼんやりと動いていた。

急に、妹が、怯えたように泣き出した。

「つれてかえったりや」

ヨツちゃんが言った。

無言で兄は、泣きじゃくる妹の手を引いた。家に帰った私は母の胸の中で泣き崩れた。

「もうちよつと早う仲間に」

母は無言で私の頭を撫でていた。

その夜、お通夜は村の寺で行われた。塩崎さんは機敏に動き回り、時々、やってくる村人と談笑さえしていた。

「庭は蚊が多いし、どうぞ、中へ入っとうくれやす」

一人一人の手をとるように座敷に導いていた。

「正則、塩や」

母の声があった。私は、土間に下り、壺から一掴み塩を握り、引戸を開けて、母の裾に投げた。

「保子は起きへんだか？」

「いっぺん、目覚ましたけど、よし、よし、したら寝てしもた」

裾の塩を払い、母は、そつと髪を手で梳いた。

「村の人は、皆帰ってもらうた。お父さんは、一晩、塩崎さんと付き合う言うたはった。こんな時やから、それも、しやないやろ？」

母は卓袱台の前に座り、私にいうよりも、自分に話しかけるように言った。

布団に入ると、川の音が聞こえた。何日も、聞いていないように思った。知らず、知らずに、意識の外に追いやっていた音が、その夜は、耳のそばで聞こえた。

道夫と話すことが、もう永遠にないのだと思うと、言い様のない淋しさが、私の胸を締めつけた。

私は、体をくの字にして、川の音を聞いた。川の音だけが、苦痛に似た悲しみを和らげてくれるような気がした。

翌日、葬式が終わると、塩崎さんと道夫の遺体は、父の運転する車で町に向うことになった。車は田島さんが用意した旧式の小型トラックだったが、父と塩崎さんは隅々まで水で洗い、黒い幌で荷台を覆った。

村人達は、四、五人ずつ固まり、遠巻きに、喪服の上着を脱いで黙々と作業を続ける二人の様子を眺めていた。

顔の知らない村人も沢山いた。こんなに多くの人々が村に住んでいたとは私には意外だった。しかし、彼等の気配を私は感じていたのかもしれない。未知

な村人の生活が、形のない怯えになった。

一様に黒い服をつけ、異なる種類の人間の動きを、只、傍観しているように思えた。

母と私は、村人達の中にいた。母は私の手を握っていた。

「そんなに汚れとらんのになあ」

田島さんの奥さんの声がした。母の顔を見上げると、声の方向を一瞬睨む母の目があった。

村は土葬であった。塩崎さんは、遺体を町で焼き、近々、遺骨をK市の先祖代々の墓に移すと言っていた。

母は乳母車に乗せた保子に、畑のトマトをもぎ、手に持たせた。保子は不思議そうにトマトを眺め、やがて舐めはじめた。

「やっちゃんほつぺたも、赤い、赤い」

母は、そう言いながら、保子の脇をくすぐった。

保子は乳母車を揺らせて、声をたてて笑った。

夏の日暮れは遅い。柵のそばにいる私に、保子の小さな掌の動きがよく見える程だ。

しかし、一旦暮れ始めると、加速度的に闇の粒子

を増やし、刻々とその色を深めていく。

それは陽光の名残を含んだ艶やかな幕をおろすように見える。

土と空の境が不鮮明になり、山は影絵になる。空にあいた小さな穴のような星が、ぼんやりと光り始める。

「くろうなってきたなあ、家に入るか？」

私の横に、乳母車を押してきた母は言った。

街道を曲がり、二つの影が現れた。

「お父さんや、塩崎さんも一緒や」

私の視線を追った母が言った。

「なにもかも世話になってしもて」

白い箱を胸に抱いた塩崎さんは、柵の外から言った。

「ほんまに、なんていうたら……」

母が口籠った。

「まあ、中に入って下さい」

父が柵を開けて、言った。

「いや、一言お礼言いたかっただけですよって」

何度も父は家に入るように勧めたが、塩崎さんは

頑なに柵から入ろうとしなかった。

塩崎さんは、白い箱に何度も何度も頭をくっつけるようにお辞儀を繰り返した。

「あんたらが来はる前、道夫は、いつ来はんのん？
いつ来はんのん？ 言うて、やかましいぐらいでしてん」

塩崎さんの視線を、私は、そっと反らした。

「おおきに、ぼんにも、ようしてもうて」

塩崎さんは私の頭を撫でると、深々と頭を下げて、踵を返した。

三人は、塩崎さんの姿が街道から消えるまで見送った。彼は、途中、三度振り返り、頭を下げた。そして、曲がり角の少し手前からは振り返ることなく足を速めて一気に消えた。

居間に入ると、父はゴロリと横になった。

「ご苦労さまでした。お風呂わいてます」

父は生返事をして、動こうとしない。

私は、昨日忘れてしまった赤カブトの餌を取り替えようと廊下に出た。

「子供やから、燃えるの早かったわ。あつという間

に骨になった」

父の、淡々とした声が聞こえた時、私は、赤いカブト虫を掌にのせていた。

掌に、こそばゆいカブト虫の足の感触があった。指を曲げると、小さな足は、小さな闇を引っ掻くようにもがいた。

私は裸足で裏庭に下り、赤カブトを葵の葉の上にそっと置いた。いつの間にかカブト虫は闇に溶けた。あれ程に艶やかな赤が、闇の色と同じである事を私は初めて知った。

十三 秋

塩崎さんが落ち葉に埋もれるように道端の斜面を背にして蹲っている。

学校からの帰りの子供達は、彼から出来るだけ距離をとり一列になって前を横切った。気配を感じたのか、塩崎さんは、ふっと目を開けて無表情に子供達を見た。そして、何事もなかったように、再び目を閉じた。

暫く歩いて、ヨツちゃんが私の耳もとで囁くように言った。

「あの人、子供の骨を川に流したんやと」

「ほんまか？」

私も声を潜めて聞き返した。

「とうちゃんが言うのとった。また聞きや言うてたけど」

あの日から一週間程、毎日私は道夫の夢をみた。目が醒めると、夢の内容は跡形もなかったが、夢の中に道夫がいたことは確かだった。夢に導かれ私は四六時中彼の事を考えていたように思う。しかし、日が経つにつれ、彼を思うことが少なくなっていた。

人の感情の器はそれ程大きくはないのだろう。

日々の些細な感情が、心を埋めつくしていた感情を徐々に希釈し、心の隅に追いやり、やがて、それは小さな癍痕になる。しかし、消えることはない。人は忘却を装いながら、無数に小さな癍痕を持って、毎日を暮らして行くのかも知れない。私にとって、道夫はそのような体験の最初であったように思う。

秋の気配が深まる頃には、時々、昼間から泥酔した塩崎さんを見かける時ぐらいにしか道夫の事を思い出すことはなくなっていた。

そして、ヨッちゃんの話も、気味が悪いとしか思わなかった。

*

「山の色が変わったな」

朝、歯を磨きながら父が言った。

色づく木々だけでなく、山全体の色が変化した。

しかし、季節の変化に、心が騒ぐようなことはなくなつた。私の目が、村の外のものから内のものへと変化していった。村人にはなれなくても、村人の目を持つことは出来たようだ。一日が終わると、一日を忘れる、所謂、生活が始まっていた。

葵が葉を落とし、初雪が降った。

学校への道で、山の音を聞いた。

地の底から這い上がってくる音は、微かな気配から、やがて、震える轟音になり、正体の見えない音

の激しさは私の心までを震撼させた。

「獅子谷が鳴ってる」

ヨツちゃんが言った。

「明日から、大人が順番にわしらを車で送ってくれるんや」

修が言った。

「雪が降った次の日からや」

ヨツちゃんが言葉を続けた。

妹は、兄の背中にくつつくように歩いた。

「山鳴りが怖いゆうてたら、みんなに笑われるで」

ヨツちゃんが言った。

獅子谷が、また、鳴り始めた。

日の暮れが早くなると、夕食の始まりも早くなった。

母が保子の口に一匙ずつ、粥を運び、父と私は無言で口を動かした。母が保子を寝つかせる頃には、一つの卓袱台で、私は、宿題を始め、父は酒を呑み始める。そして、保子を寝かせた母が、食事を始める。

「塩崎さんが辞めたよ」

父が言った。

母は驚いたふうもなく、

「そうですか」

と、箸を止めずに言った。

何れ、このような事態になるのは誰もが予想していた事だった。

「辞めさせられはったんですか？」

「いいや、自分から辞めた。最低、現場の作業員の給料計算さえしとったら、誰も辞めいうもんはおらへん。わしみみたいに、業務報告書を作成して、送っても、県庁の誰も見んやろ。まあ、見ても報告書の嵩やなあ」

塩崎さんは誰にも別れを告げずに村を出た。彼の辞職が分かったのは、それから一週間程して、若い独身の男が塩崎さんの後任だと役場を訪れた時だと父は言った

「奥さんはいたはったんやろか？」

「さあ、わからへん。あの人について分かっているのは子供が死んだということだけや」

父は、仰向けになり、天井を睨んだ。

「子供の事だけが原因やない気がするなあ。あの人はもともとあんなんやったんかもしれへん」

父は煙草の煙を天井に吹き上げた。

「せやけど、誰でも、こんなところへ来たらああなるんが普通かもしれん。それに、あの人は辛抱する必要がのうなっぺんやから」

そして、暫くの沈黙の後、父は言った。

「冬やなあ、とうとう閉じ込められた」

十四 冬

家族は正月も村で過ごした。他に身の置処がなかったと言った方が当たっていたかも知れない。

雪と寒さの単調な日々が続いた。

川は、凍るような水を淡々と流し続けた。

保子は頼りない足取りで歩き始め、父は保子を肴に酒を呑んだ。

母は編み物に精を出した。

村の子供達は、手作りのスキーやソリで雪と遊ん

だが、私には面白い遊びにはならなかった。

家からあまり出なくなり、裏庭の築山をぼんやりと眺めている事が多くなった。時々、南天の実を食べに鶇がやってきた。せわしく木が揺れ、細かい雪を落とし、慌ただしく飛び立って行った。静寂が戻ると、また、何も動くものはなくなった。

道夫なら、冬の村で何をするだろうかと、ふと思った。彼なら、雪の白に物語を書くだろう。自分の姿が他人に見えない話、途中で消えた話の続きが、軒から思い出したように落ちる雪の雫と重なった。

自分がない世界、永遠に自分という意識の失われた時間を、私は、ぼんやりとした不安を抱きながら、思い続けた。

微かな不安を払うように、庭に降り、手で、雪を掘る。今日も、指先に葵の細い根が触れた。

二月にはいると、トンネル工事は一時中止になった。

父は役場には行かず、一日一回、現場の見回りに出掛けて行った。

昼過ぎに塩崎さんの後任の若い人が父を迎えに来

て、タイヤチェーンを巻いた車で、出掛けた。

私が、学校から帰る頃には、父はラジオを聞きながら酒を呑んでいた。

「毎日が異常なしや、あんなところ、わざわざ行つて
わるさするもんもおらんわ。暇なんもたいがいしん
どい」

父が言った。

「田島さんに猟にでも連れてもうたら？」

母が言った。

「誘うてくれはるんやけど、いざ、行くとなると、
なんやたいそうになって。それに、町からくるもん
と一緒にになったら危ないいうて、平日に行かはるし、
仕事さぼってるみたいで後ろめたいんや」

「家でお酒呑んでるもんもあんまり変わらんと
思いますけど」

母は笑いながら言った。

「それも、そうや。とうとう鮎釣りもようせん
だし」

父も笑った。

学校から帰ると、家に父の姿はなかった。

「お父さんは？」

と、母に聞いた。

「今日は遅いなあ」

母は柱時計を眺めながら、不安そうな顔をした。

「えらいこっちゃ、トンネルが崩れよった。みんな埋まってしもた」

引戸を開けると同時に父は言った。

「役場で県庁に連絡したり、田島さんと一緒にもう一遍現場に行ったり、大変やった。旧道への影響なかつたんでほつとしたとこや」

そう言って、父は母が出した水を一気に飲んだ。

「役場で、県からの連絡待つわ。遅うなるかもしれん」

父はそう言って、また、出て行った。

夜遅く父は、意気銷沈して帰ってきた。

「今まで、待ってたんやけど、県からも、府からもなんもいうてこうへん」

疲れた体を沈めるように、重い外套をつけたまま

炬燵の前に座りこんだ。

「ほっとけいうことやるか？」

「明日、なんか言うてきますって」

母が父を元気づけるように言った。

保子が父に近づき、覚えてたてのお帰りなさいをした。
た。

父の顔が淋しそうに笑った。

十五 螢、再び……。

三月に入っても、父にはなんの指示もなかった。

トンネルは埋もれたまま、工事を再開する気配もなかった。

父は、一日一回の見回りを終わると、役場で、田島さんと将棋をさしたりして、時間を過ごした。

「なまけぐせがついて、県に帰ると、お荷物になるかもしれないなあ」

と、口癖のように言った。

川は雪解けの水を運び、村の景色から、衣を剥ぐ

ように雪が消えていった。

父の職務が解かれたのは、五月半ばのことだった。トンネル工事は無期限中止となり、たった一人の出向は終わりを告げた。

明日、村を出るという前夜、誰にも告げずに、私は、獅子谷に入った。

一家が、田島さんに送別の意味で招待された夜、私は、頭が痛いと言った。そして、一人で川の音を聞いていると、急に、獅子谷に行こうと思いついた。獅子谷に行く為の嘘ではなかったが、結果はそうなってしまった。

村を出る日が近づくにつれ、心に広がってくる切羽詰まるような思いが小さな嘘になり、やがて、それは獅子谷に向かって、急に流れだした。今行かなければ、永遠に道夫を失うような気がした。

私は、只、乱れ飛ぶ螢を目指して歩いた。
後ろを見ないように歩いた。

闇、獣、幽霊、決心を鈍らせるものを頭に浮かべないようにして歩いた。足元を照らす懐中電灯の光の輪を追いかけようにして歩いた。

橋を渡る。

やがて山道は細くなり、急な下りになる。一年前の光景が、目の前の光景に重なる。川の気配がして、水の音が微かに聞こえてくる。なにもかもが、あの夜と同じだ。

草叢の中で目を凝らした。

しかし、光るものはない。私は、草を両手でかきわけながら、夢中になって進んで行った。

足が滑り、懐中電灯を離れた手が、ひきちぎられた草を数本掴んだ。体はどのような軌跡を描いたのだろう。ただ、闇の中に引きずり込まれて行くという感覚しか私にはなかった。

川際まで滑り落ちた私は、暫く何が起こったのか分からず啞然としていた。右足の激しい痛みが、私を正気に戻した。

深い穴の中に落ちたような気がした。立ち上がるうともがいても、どうしようもなかった。このまま死ぬかもしれない。押し寄せてくる不安に、気が狂いそうになった。

不安と痛みにより、大声をあげようとした私の目の前

を、小さな明かりが一つ、微かな光の線を引き、そして、闇に溶けるようにふっと消えた。

父は既に定年退職した。

父母は一年に二、三度、大阪の私の家を訪れ、一週間程滞在する。その間、孫と遊ぶのが唯一の楽しみだと言った。

村の話が出ることは少ない。たまに話題になっても、私の怪我の事に終始する。なんで、あんなところに行ったんやという父母の問いかけと、古いことやから忘れてしもうたという私の答で、何時も終止符が打たれる。私、保子の結婚、孫の誕生、父の定年、様々な家族の出来事の中で、村での生活は次第に幅を狭めていった。

トンネルは随分前に開通していた。

京都から二時間足らずで村に行くことが出来る。

行ってみようかと、ふと思う事もあるが、あの時以来、私は村を訪れたことはない。

平成二十一年七月二十一日（火） 了

私は勝手に彼をムツシュと呼んでいる。

時々、夕食に立ち寄るファミリーレストラン。夕食時も混雑していない。私は大きなテーブルで、小さな夕食をとるのが好きだ。今日はミラノ風ドリアとトマトサラダ。気が向けば仕事もする。とりとめのないことを考える。派遣社員は、社員のことを社員さんと言う。蔑視か、羨みか。もちろん私もそう呼ぶ。同じ仕事をしながら待遇がまるで違う。月給と時給の違いは大きい。会社の都合でいつ首を切られても文句は言えない。ああ、こんなのでいいのかなあといつも思う。年齢は容赦なし。いつの間にか三十路が迫ってきた。結婚……。気の小さい私が、他人と暮らしていけるだろうか。それも男と。

ムツシュが来た。彼がメニューを広げる。メニューにつけられた番号を押す。ボタンはムツシュの胸にある。

「ミラノ風ドリアとトマトサラダ。ありがとうございます
いました」ムツシュは復唱する。

料理を待つ間小説を読む。「老人と海」ヘミング
ヴェイ・福田恆存訳。短い小説を何度も読む。薄い
本は、私のどこにでも滑り込ませることが出来た。
「この男に関する限り、何もかも古かった。ただ眼
だけがちがう。それは海と同じ色をたたえ、不屈な
生気をみなぎらせていた」

海と同じ色。長い間、海を見ていない。次のお休
みに行ってみようか。急に海が見たくなる。

「お待たせしました」

ムツシュが料理をテーブルの上に置く。

「ありがとう、ムツシュ」

私は声に出さずに言う。

冬の日、仕事で遅くなった。ファミリレストラ
ンは閉まっているだろう。コンビニで何か買って帰
ろう。色々考えながら、冬の夜道を歩いた。ファミ
リレストランに電気がついていた。何気なく覗く
と、ムツシュがいた。床に掃除機をかけていた。彼
は眠る必要も、食べる必要もない。私はそんなムツ
シュを見ていた。

年が明けても、私の日常は変わらない。会社へ行

って働いて、家に帰って眠る。去年の、もう去年になった、天皇誕生日に海を見に行った。誰もいない浜辺に座って海を見ていた。寄せては返す波を見ていた。私はこんな所で何をしているのだろうか。友達もいない。正月は家に帰ろう。でも帰らなかつた。もう家には私の居場所がない。ムツシユのことを思った。私はムツシユと同じだ。

今日は思い切って、「お子様ランチ」を注文した。ムツシユなら……。 「お子様ランチ。ありがとうございます。ございました」と復唱する。ウェイターが確認に来た。すごくいやな気分になった。私は思わず言ってしまった。

「おかしいと思う？ 君」

「機械ですから」

私は立ち上がった。

「もう、いい」

その日、私は夕食を食べなかつた。

雪が降った。今年はよく降る。三回目。私はいつ

ものファミレスにいる。今日もムッシュがいない。雪だから客も少ない。車はのろのろ運転だ。車のライトで浮かび上がる雪の白さは美しい。とつくに冷めてしまったコーヒーを前にして、深いため息をついた。ムッシュがいないレストランは、私の中で急に色あせていった。ウェイトレスが何回目かの水を注いだ。

「ありがとう。ここにいたロボット、近頃見かけないけれど」

「ああ、いなくなつたみたいですね」

「どこへ行つたの？」

「知りません、何なら店長を呼びますが」

私は少し考えた。

「すみません、お願いします」

私は何を考えているのだろうか。

ほどなくやってきた彼に見覚えがあつた。お子様ランチの時の彼だった。あの時は若く見えたが、三十を少し超えていると思う。彼も私を覚えていた。

「あの時の」

彼は私の前に腰掛けた。

「ロボ・ボーイのことで？」

「ええ」

「彼は試作品だったんです。問題がありました。その一つは子供です。怖がる子供といたずらする子供。それと……」

彼は言いよどんだ。

「私の主観なんですけれど」

彼が話し始めた。とても不思議な話だった。

「初めは重宝していたんです。食べないし、休憩時間もいらぬ。文句も言いませんしね。一日中働く。閉店後の掃除は任せられる」

「ただムツシュは少しずつ変化していった。」

「私にだって、苦手なお客様はいます。人間ですからね」

ムツシュの態度が、客によって微妙にちがってきただ。そつと音を立てずに水を置く客と、少し乱雑に置く客。

「ロボ・ボーイの接客態度が悪い客は、私らが苦手だと思ふ客と一致しているんですよ」

それが段々と激しくなってきた。水をこぼすよう

になってきた。やくざに殴られると、反撃した。

「それと」

彼は言葉を句切った。

「彼は眠るようになった」

「眠る」

「私にはそう見えませんでした。無反応になるのです。そういうことで返品しました」

「今はどこにいるのですか」

「敦賀だと聞いています」

「敦賀？」

「福井県じゃないですか」

福井県と言われても分からない。確か北陸だ。

「何なら、本部に聞いてみましようか？」

「結構です。聞いてみただけですから」

「それはそうですね」

彼は出口まで送ってくれた。

「雪道は滑りますよ。気をつけて」

私の心は何年ぶりかで弾んでいた。敦賀へ行こう。

ムツシュを探そう。

金曜日に敦賀へ行くことにする。久しぶりに休み

をとった。昼過ぎに京都駅で精進弁当を買った。ちよつと迷ったが缶ビールを一本買った。二時間足らずの旅だが、一泊することにした。一人旅は何年ぶりだろう。短大の時はよく一人で出かけた。というより、人と旅することが出来なかった。枕を並べて他人と寝ることが出来なかった。一人旅は何も起こらない方がいい。ぼんやりとさまよるのがいい。過ぎ去っていく時間の中で、私は消えていく。どこにも私はいない。私は風になる。誰にも見えない風になる。

車窓に琵琶湖が見えている。琵琶湖が見えなくなると、急に車窓が暗くなった。殺伐とした風景になった。雪が降り始めた。風も強いのだろう。黒と白の世界だ。私はどこへ行くこうとしているのだろう。何を求めて。

敦賀は寂しい駅だった。目立つ色はなく、光の少ないモノクロ写真のような光景だった。線路やホームがたくさんある。雪はなかった。寒さが人の口を重くさせていた。こんな所にムツシュはいるんだ。昨日ネットで、ロボ・ボーイで検索した。ムツシュ

がファミレスで注文をとる様子が出ていた。橋本製作所。原発の近くにある。敦賀湾に夕日が沈む頃、バスが来た。敦賀半島にある民宿へと向かう。通された部屋は二階で、近くに海を感じた。カニはあまり好きではないので、お造りをたのんだ。ビールを一本。小食で、グルメではないが、魚はおいしかった。明日は十一時の約束だ。海に行ってみよう。

朝は十時に宿を出た。灯台が見えた。あそこまで行ってみよう。灯台の扉は開いていた。作業服を着た人が二人いた。

「見学してもいいですか」

いつもなら言わない言葉が出た。二人は驚いたように私を見た。

「いや、いいです」

「かまわないですよ。どうぞ」

彼等は一月に一度の点検に来ているのだと言った。螺旋階段を上がる。無限階段というだまし絵を見たことがある。最上階に着いたと思ったら、そこは一階なのだ。上がるのと降りるのが重なった空間。長い螺旋階段を上がりながら、恐れた。

日本海は、暗く、荒れていた。宿で、おにぎりを作りましようかと言ってくれたが断った。他人の手で握られるのがいやだった。昨日駅で買ったパンを食べた。荒れている海には何もない。私はコートの襟を立て、タクシーを呼んでもらうため、宿に帰った。

橋本製作所は原発のそばにあった。原発向けのロボットを作っているのかもしれない。ムッシュは危険な場所で働かされているのだろうか。受付で、柳原という人を呼んでもらった。痩せた童顔の男が出てきた。

「ロボ・ボーイのことで来られた村瀬さんですね？」

「はい。譲ってもらえますか？」

「まあ、倉庫にいますが。修繕の方が高くつくんですよ。でも開発費が結構かかっていますから、捨てるのもちよっと。回路を取り替えました。何に使われるんですか」

私は黙った。

柳原さんはまあいいやという感じで、

「上司と相談しましたが、二十万円でいかがですか」

思っていたより安い。五倍でも買うつもりだった。

「大丈夫です」

「それじゃ宅配で送ります」

私は住所を書いた。彼は振込先を書いた。

「すぐに、送りますよ」

「振り込むのが遅れるかもしれません」

「全然かまわない。あなたはそんな人じゃないから」

ちよつと上目遣いに私を見て、

「もう一人、あなたと同じことを言ってこられた方があるんですよ。タッチの差でああなたの方が先だった。あつ、来られましたよ。多分あの人だ」

ドアを開けて入ってきた男に見覚えがあった。ファミレスの店長だった。彼ははにかみながら近づいてきた。

敦賀まで一緒のタクシーで帰った。車内では一言も喋らなかつた。

駅に着くと、

「僕はもう少し先に行ってみようと思います」

と、言った。

私は京都に帰ると言った。

一回だけあの長いトンネルを通ったことがある。

出口がないような長いトンネル。ずうっと暗闇の中にいるようで怖かった。敦賀は私の終着駅だ。

「それと」

彼は言いよどんだ。

「あなたの家に行っていていいですか？ 私は水村とい
います」

彼は名刺を出した。水村優。優の字にユウとふりがながあつた。

私はしばらく黙っていた。彼も言葉を続けなかった。私は名刺を持っていない。私の仕事は名刺が必要ではなかった。私は手帳を出し、私の住所と名前を書いた。携帯の電話番号も書いた。電車の時間が迫っていたので、私はホームへ急いだ。振り返ると彼が手を振っていた。私は無視して、ホームへの階段を上がった。柳原さんが、帰りがけに言った言葉が突然頭に浮かんだ。

「ロボ・ボーイが死ぬ日が来ます」

「死ぬ……」

「全機能を停止する日です」

私は何故か分かるような気がした。彼は続けた。

「それは明日かもしれないし、百年後かもしれない
い」

日曜日にムツシユが送られてきた。

「ムツシユ（ロボ・ボーイ）が来ました」と優にメールを送った。

「月曜日の午後八時に伺います。ムツシユとの再会が楽しみです」

「了解」

スイッチを入れた。

少し興奮してメニューボタンを押した。当然お子様ランチ。

「お子様ランチお一つですね。ありがとうございます
す」

懐かしい声が聞こえてきた。

「ムツシユ。君の名前はムツシユ」

「私の名前はムツシユ。名づけていただいております」

とうございます」

「ムツシュ」

「はい」

「聞いてもいい。君には心があるの？」

「こころ……。分かりません。プログラムされていません」

私はムツシュをキッチンに連れて行った。コップを取り、蛇口を押す。

「できる？」

「はい」

ムツシュは正確に私の行為をまねる。私は拍手する。

「完璧だよ、ムツシュ。私についてきて」

私のマンションは二DKだ。一部屋は机とパソコンを置いて書斎ふうに使っている。もう一つの部屋は寝室。

「掃除をお願いね」

彼自身が掃除機になっている。掃除をし始めたので慌てて言った。

「いいの、明日からで」

ムツシュは頷いた。

「分かりました。あなたの名前は？」

「私は村瀬瞳」

「私はなんて呼べばいいのでしょうか」

「瞳でいいよ。ひとみって呼んで」

「ひとみ」

「はい」

「とても素敵な名前ですね」

私は再会を祝して、ワインを抜いた。

「ムツシュ、君と私に乾杯」

月曜日の午後八時。優はきっかりにやって来た。

ダイニングに通す。ムツシュがお茶を運んでくる。

「ムツシュ、こんにちは」

「いらっしやいませ、店長」

「店長はいいよ。優と呼んで」

「こんにちは、ゆう」

その日は、三十分ほどして優は帰った。

「また、来てもいい」

「いいよ、この時間ならほとんどいる。いない時は

メールする」

「ありがとう」

一週間に二回ぐらい優は来た。時々泊まってい
く。一つしか布団がないので、彼は寝袋を持ってきた。
私は吹き出した。私とムツシュは寝室で眠り、優は
書斎で眠った。書斎のパソコンは寝室に移した。二
つの部屋はダイニングに面していて、手洗いに行く
時もお互いの部屋を通ることはなかった。部屋の個
別性は保たれていた。

私は彼のことを何も知らない。結婚しているのか、
子供がいるのか、何も知らない。年令さえ知らない。
私達は向かい合う。相手が何者かは関係がない。前
にいる人が彼だ。私が知っている以外の彼を知りた
くない。私達は向かい合い、とりとめのないことを
喋る。テレビのニュースだったり、新聞だったりす
る。私達の間にはセックスはない。だから、向かい合
うことが出来る。優は時々朝ご飯を作る。おいしい
と言うと、とても嬉しそうな顔をする。夜は、ムツ
シュと私が枕を並べて眠る。平穏な一日が過ぎてい
く。

春になった。私は春が嫌いだ。春は生殖のにおいに満ちている。性器である花は咲き乱れ、生殖を担う虫や鳥が飛び交う。なんていやな季節だろう。優と私とムツシュは一日中部屋の中にいた。珍しく休みが一致したのだ。テレビも一日中桜を映している。昼食後、事件が起こった。後片付けに動き出すはずのムツシュが動かない。二人はムツシュを見つめた。ムツシュが動かなくなった。

「ムツシュ」

語りかけても無反応だ。

「電池切れかなあ」

優が首をかしげた。

「ムツシュは電池で動いていたの？」

「さあ。でも、energyはFULLだよ」

「死んだ」

私がぼつりと言った。

「死んだ」

優は繰り返した。私は少し泣いた。オブジェになつてしまったムツシュを二人で寝室に運んだ。優は

私の肩を抱いた。私は目を閉じた。桜の花びらが舞っている。優の涙が私の胸に落ちた。強いものに突かれた。気の遠くなるエクスタシーが私の全身を震わせた。二人は満開の桜の下にいた。優の身体が離れ、やがて、降り注ぐ無数の桜の花びらの中に消えていった。彼は私の身体にしるしを残した。生まれ た瞬間に死が約束される「いのち」。誰もが生を与えられた瞬間、死ぬという運命を与えられる。永遠なんてないんだよ。

私はその「いのち」と一緒に生きていこうと思っ た。

平成二十一年八月二十五日。了

1 トルコ記念館の女

みなさんはかしのざき榎野崎灯台を知っていますか。漢字を知らない人のために「かしのざき灯台」とふりがなをつけます。榎野崎灯台を知らない。では説明します。まず、大島を知っていますか。知らない。ここは串本となりは大島。知っている。歌の方が有名なんだ。和歌山は本州最南端なんですよ。和歌山は知っていますか。知っている。みかんの産地だ。和歌山ラーメンだ。熊野古道だ。終わり。それだけ……。

和歌山人には、どうしても「ざ」「じ」「ず」「ぜ」「ぞ」がうまく言えない人が多い。ぞうきんがどうきん。象がどう。でも私は大丈夫だよ。どうさん、どうさん。結局私も和歌山人だ。

榎野崎灯台への道にトルコ記念館がある。私の職場です。職員は一人、私だけ。年中無休だから。私の休みには高校生のバイトが入ります。

大島はトルコと密接な関係があります。あっ、団体さんがやってきた。私の案内で紹介します。えへん。

「一八九〇年、今から百二十年前、トルコからオスマン皇帝の特使が派遣されました。皇帝親書を明治天皇に奉呈し、オスマン帝国最初の親善訪日使節団として歓迎を受けました。多くの乗員がコレラに見舞われたため九月一五日になってようやく横浜出港のめどをつけ、日本側が台風の時期をやり過ぎように勧告したのですが、その制止を振り切って帰路につきました。エルトゥールル号が、ここ、檜野埼灯台近くで座礁しました。犠牲者五八七名という大惨事でした」

そこまで説明して、

「二階からその現場を見ることが出来ます」

と、言うとながいがいの方は興味を示します。

「おお、このパンフレットといっしょじゃ」

いろいろな方言が飛びかいます。

「地元大島村の人々はトルコ人の遭難者に温かい対応を行いました。日本とトルコの友好の始まりとし

て有名なエピソードになっています」

「おみえそんなこと知っていたけ」

「知るわけなんぞ」

「どうざいのほうに行かれましたら、」

「どうざいけ？」だの方もおかしくなってきた。

「どうどうがありますか」

「どうどうけ？」

「もう、いやざ」

団体さんが出て行くと、いっぺんに孤独になる。

トルコとの友好も喋りたかったのに。だからあなたに喋ります。

「イラン・イラク戦争で、トルコ機は近隣に位置することから陸路での脱出もできる自国民に優先して日本人の救出を計ってくれました。実際この救援機に乗れなかったトルコ人約五〇〇名は陸路、自動車でイランを脱出しました。このようなトルコ政府とトルコ航空の厚情の背景には、一八九〇年（明治二三年）日本に親善訪問した帰途、和歌山沖で遭難したフリゲートエルトゥール号救助に際し日本から受けた恩義に報いるという意識もあったと言われて

います」

もうだれもいない。団体の予約は入っていないから、誰も来ないと思う。五時に閉店。まだ日が落ちていない。灯台で海が見たい。もし門が閉じていても、私だけが知っている抜け道がある。それはひみ、つ。

灯台に上がり、水平線を見ている。日が昇り日が落ちる。今日は曇っているから夕陽は見られない。どっと暗くなる。灯台に灯が入った。一四〇年も律儀に海を照らしている。日本最初の石造灯台だ。近くにある官舎には灯台守たちの家族がいたのだろう。一家あげて海を守ってきたのだろう。今は誰もいない。

海の音しかない。少し寒い、風が気持ちいい。
二二才、処女。

真っ暗な海を見つめると、奇妙な気分になった。永遠なんてない。ふとそう思った。わたしも結婚するだろう。子供を産み、おばさんになり、年寄

りになり、孫ができ、おばあちゃんになる。そして死ぬ。地球も、宇宙もそうだ。やっぱり永遠なんかない。

唐突に秋葉原通り魔のカトウのことを思った。わたしと出会っていたらあんな事件を起こさなかったかもしれない。誰もがカトウになるかもしれない。被害者側にも。携帯で現場を喜々として写していたあなたにも。そんな世の中に生きているんだ。もう二年経った。ほとんどの人が思い出すこともない。ふっと空を見上げるといつの間にか白い月が出ていた。

冬場の平日はトルコ記念館を訪れる人は少ない。檜野埼灯台へ行く人も通り過ぎていく。昨日は二組だった。老夫婦と一人旅の女性。夫婦はお互いをいたわるように階段を上がって行った。女性はぼつんと一人離れていた。彼女は足音をしのばすように歩いた。

目の前を様々な人生が横切っていく。そして多分二度と会うことはない。

携帯が鳴った。日米修好記念館の幸子さちこさんからだ。

「今何してんの？」

「海を見てる」

「何が見えんの」

「真っ暗、灯台の灯りが真っ黒な海を照らしてる」

「そう、星はないか」

「幸子さんは何してんの」

「もう帰る。実家によって、アリスをつれてね。それじゃ、さようなら」

と、言って電話は切れた。幸子さんは私より五個年上。アリスはフランス人との混血で幸子さんの娘だ。三才。アリス・マルタン。

男はふらっと、日米修好記念館に入ってきた。名前はなんだっけ。自称画家。大島の絵を描きながら島をまわっていた。日米修好記念館に只で入ってくる男になり、実家に居着いてしまった。最初は猛反対していた両親も、幸子さんの妊娠を知ると認めないわけにはいかなかった。彼の絵は何回か見たことがある。私よりターヘだった。生まれてきた子供に男はアリスと名づけた。僕は不思議の国のアリスが

好きやねん。たどたどしい日本語でそう言ったいう。誰も反対しなかった。女の子は金髪で、青い目をしていたから。

幸子さんは男の絵を「売り物」という札を立てて日米修好記念館に置いた。明らかに業務規定違反。私も絵を見たがやっぱりターヘだった。「売り物」と言う字の下手さもすごかった。

「ピカソみたいやね」

と、皮肉を言うと、幸子さんは

「私もそう思うんや」

と、言った。

意外にもその絵は、一〇万円で売れた。夫婦はるるん気分で一〇万円の値札をつけて絵を五枚置いた。ひと月たっても一枚も売れなかった。「やっばり一〇万円はねえ」

一万円にした。また、ひと月たっても一枚も売れなかった。千円にした。また、ひと月たっても一枚も売れなかった。百円にした。また、ひと月たっても一枚も売れなかった。どうぞお持ち帰りくださいと書いた。でも、一枚もなくならなかった。一〇万

円で買ったのは幸子さんのお父さんだという噂が流れた。それも真偽のほどは定かでない。

男はアリスの名前をつけ、大量の愚作を置いて島を出た。遠く離れた異国の、それも小さな島に子供をつくって。

幸子さんはアリスに友達のようにつきあっている。

「これ、お母さんに似合うと思う？」

「アリスはどれが好き」

「今度お休みにいきたいところがある？」

「どっちのケーキにする？」

でも、父親のことを聞かれたら、どうしようかと迷っている。海金剛を見ながらそう言った。私の肩に手を置いて、

「そうや。パパがいるから君はここにいるんだよ。」

それってどう」

「ええよそれで」

即答した。

海金剛は奇岩だ。海から三角形の岩がいくつも突き出ている。海金剛の由来については知らない。知らなくても、今、私の前にあるのが海金剛だ。何年あ

の姿で立っているのだろう。それに比べると私の命なんて一瞬だ。

私と幸子さんは姉妹みたいに仲良く黙って海金剛を見ていた。

2 日米修好記念館の女

日米修好記念館は一七九一年アメリカ商船が大島に来訪し、日米交流したことを記念して建てられました。アメリカ人として日本に最初に渡航して貿易を申し込んだのはジョン・ケンドリックです。串本町の紀伊大島に来航しました。ペリー提督が浦賀に来航する六二年も前です。

また、^{つばき}椿は灯台に忍び込んだ。でも夜の灯台ですてきだろう。真っ黒の海に灯台の光が伸びる。

幼い頃は、いつも灯台の下で遊んだ。椿もベビーカーに乗せられて遊びに来ていた。それから二十年余、二人は立派（？）な女になった。椿は美しくて

優しい娘だ。今は一期一会の人々を相手に私と同じような仕事をしている。

二〇〇二年には灯台に展望台が完成し素晴らしい眺望になった。朝日が上がり夕日が落ちる同んなじ水平線に。さあ仕事は終わりだ。

私はアリスを一人の人格としてあつかっている。
愛^{いと}おしいけれど私の所有物ではない。青い目にアランの面影を見ることがある。でも、アランの所有物でもない。アリスはアリスだ。あいつ本当にアランという名前なんだろうか？ アラン・ドロン。
考えても仕方がない。さあ、帰ろう。アリスが待っている。

3 トルコ記念館の女

朝八時に出勤する。まずトイレ掃除だ。トイレは一日三回チェックを入れる。トイレは上の駐車場にあるから、あまりこまない。

とおる
徹からメールが来た。

『今度休みいつ？』

すぐに返す。

『水曜日だよーん』

すぐ返ってくる。

『串本にドライブにいかへん』

しばらく考えてメールを返した。

『ええよ予定あらへんし』

徹は古い旅館の長男だ。と、思う。弟の方が優秀だと聞いたことがある。同級生だ。成績は最悪だった。

徹が家に迎に来てくれた。店のバンを借りてきたという。串本大橋を渡って、橋杭岩^{はしぐいいわ}を展望できる駐車場でおりました。

ここには何回も来ているが、いつも感動する。壮观だ。私の住んでいる大島や、大橋が見える。うすかわ饅頭を三個買った。当然私が二つで徹は一つだ。先に一つ食べた。

「ううんおいしい！」

「俺にもくれよ」

「あとであげる」

「いこら。夕方にも通るし」

冷たい風が気持ちいい。初っぱなから、来てよかつたと思った。

大門坂に寄った。ここも何回か来たことがある。今はパワースポットとして人気なんだって。かなり坂道を歩きます。足ぱんぱんになった原因かなあ。夫婦杉を過ぎると空気が一変した。冷氣というか、不思議な雰囲気になった。熊野古道の雰囲気を味わう。ここからは異界なんだ。古いにしえびと人の歩く背中が見えた。何百人の人がひたすら歩いていた。そして、かき消すように消えた。

那智の滝に向かって車を走らせる。カーブをいくつもまわると、突然滝が現れた。「おう」

と、思わず叫んだ。

「なんやねん」

「滝、滝、滝が見えたよ」

那智の滝は一瞬にして視界から消えた。

「急にわめくからびっこりするやん」

「ごめん。せやけどきれいやったなあ」

滝壺に虹がかかっていた。手を合わす。徹も手を合わせていた。

青岸渡寺せいがんとうじに上がる。絵はがきなんかでよく見る光景だ。滝と三重塔がバランスよく見える。

4 一人旅の女

今日も忙しいのかな。忙しいのはいいことだ。父ちゃんと勝浦でまぐろ料理店を始めて三十年近くになる。息子は二人いるが大阪で働いている。滅多に帰ってこない。

客はほとんどが観光客だ。ほとんどが一期一会だ。

十一時最初の客が引き戸を開けた。若い女性だ。

一人だった。一人旅の客も多い。

「いらっしやい」

元気よく声をかける。

「いらっしやい」

父ちゃんもくぐもった声を出した。

一番端に腰を下ろした。お茶を出す。メニューをじっと眺めている。しばらくして、「まぐろ定食」

と、小さな声で言った。

「まぐろ定食、一丁」

と、父ちゃんが言う。

「へい、まぐろ定食、一丁」

と、私が繰り返す。夫婦でいつの間にか出来た約束だ。注文の確認である。カウンターだけの店だから、父ちゃんに聞こえないことはない。

父ちゃんは私にまぐろを触らせない。朝一番に仕入れたまぐろを一日中料理する。私はそれ以外のことをする。ご飯をよそい、お茶を入れ、後片付けをする。お客さんのおしゃべりも、賑やかしだ。

「寒いね」

「寒くない。でもシャツター街は寒かった」

「昔は賑やかやってんけど。どこからきたん？」

「東京」

「ずいぶん遠いね。どこをまわったの？」

「大門坂。那智の滝」

この娘は単語ばかり喋る。

「どうだった？」

「すてき」

会話が続かない。ブチブチと切れる。その時、賑やかな年寄りが三人、入ってきた。

「いらっしやい」

「いらっしやい」

「まぐろ定食、三丁」

「ヘイ、まぐろ定食、三丁」

次に若いアベックが入ってきた。女の子は若くてかわいい。化粧をしていない。口紅を薄く引いている。でもリップクリームかもしれない。

男はどこにでもある顔だ。と、いうより不細工。

「車はどこに停めたらええん」

青年が言った。

「一八番から二〇番」

私は共同の駐車場を言った。

「ほんなら回してくるわ」

「まぐろ定食でええね」

「ええよ」

青年は出て行った。

「まぐろ定食、二丁」

「ヘイ、まぐろ定食、二丁」

店は一気に活気づいてきた。

「生ビール」

女の子が言った。

「生ビール一丁」

私は言った。

「生ビール一丁」

珍しく生ビールは父ちゃんが入れた。この娘が気に入ったのか。いくつになっても嫉妬の種は尽きない。私だっと思うけれど、父ちゃんは無関心だ。

「大門坂から那智の滝、みんな遠足でいったところやけど」

「どこから来たん？」

「大島生まれの大島育ち。ここは、串本となりは大島」

ほっておいたら歌い出しかねない。さすが喋りすぎと思ったのだろう。生ビール半分を一気に飲んだ。左端と右端でえらいちやうなあ。

串本大橋が完成したんは、一〇年ほど前。それ以

前は大島と串本をむすんでいるのは巡航船とフェリーしかなかった。その巡航船も、フェリーも串本大橋の完成に伴い姿を消した。みんな車社会になっていくなあ。大島には父ちゃんとよく行った。若かつたし。おっ、考え事してたらあかん。商売、商売。青年が帰ってきた。

「分かった？」

と大島がきいた。

「分かった、分かった。ええなあお前」

「うちは運転せえへんもん」

「俺はアッシーかいな」

「足の短いアッシーやな」

大島が言った。

滅多に笑わない父ちゃんも笑った。三人の男も笑った。一人旅は笑わなかった。

一人旅がメニューをじっと見ていた。

「まぐろの内臓料理一品」

「まぐろはほかすところがあらへん。内臓もな」

「ふーん」

「白子でも食べてみるか。ふぐの白子と同じや」

「一つ」

「白子一丁」

「白子一丁」

と、私が返す。

「仕事なにしてんの？」

おばはんのお節介。だけどズカズカと入っていった方がいい。これは接客三十年の知恵だ。

「契約社員。契約期間が終わると、次の契約までバイト。節約。それで旅に出る」

「そんな生活はあかんで」

三人の真ん中が言った。

「おい、説教するな。もう先生やないんやから」

左の男が言った。

「わしら同級生」

ひとしきり、年齢当てになり。料理が出来て、ご飯を盛ろうとすると、三人が声を揃えて、

「ご飯半分」

と言った。

「えっ」

と、聞き返すと

「年寄りはあるまり飯を食うたらあかんねん」

右の男が言った。

「車で来てんの」

「レンタカー」

白子は食べにくそうだった。口に合わないのかもしれない。

「ご飯は残してもええけど、まぐろはあかんで」

意地悪おばさんは言った。

「包んで持って帰り」

耳元でささやくように言った。

今度は青年がメニューを睨んでいる。そして、突

然、

「大トロ三千円」

と叫んだ。

父ちゃんもつられて、

「大トロ三千円」

私もいちびって、

「大トロ三千円」

今度は一人旅の女も笑った。きれいな白い歯並びだった。

5 くじらの博物館の女

鯨がこんな芸をするとは知らなかった。思わず拍手をする。

「鯨に餌をやれるねん」

「おいおい、よく遊ぶなあ」

徹はあきれたように言った。私は子供に戻っている。急に足が止まった。飼育員の女の人が男の飼育員に叱責されている。女の人は直立不動だ。何かミスをしたのかしら。私には分からなかった。でも気持ちは分かるような気がする。ショーの中であんなに輝いていた制服が悲しい。かけよって、肩を抱いてあげたい。でも、通りすがりの私にはそれができない。

餌に群がってくる鯨も悲しい。私は鰯を全部放り込んだ。

「女のやることはようわからんわ」

後ろで見ていた徹が言った。

6 無量寺の女

「次は無量寺」

徹が言った。計画は全部徹がたてた。どこへ連れて行ってくれるのか楽しみだった。でも、旅は終わりに近い。

「无量寺？」

「円山応挙は知っている」

「知らない」

「幽霊の絵は知ってる」

「知ってる」

「それを描いた人の弟子。なんしか江戸時代の人。

調べたけど、みんな忘れてしもた」

「頭悪いもんね」

「ほっといて」

「ものすごい道が狭いやん。気づけてな」

二人とも黙った。狭い道を抜けると无量寺があった。

受付に行くと四〇才ぐらいの女の人が座っていた。

この人も一期一会の女だ。

「ご覧になったら、宝物殿に案内しますから」

「レプリカか。なんかしようもないな」

私は言った。

五分ぐらいで見終わった。長沢ながさわ芦雪ろせつの絵が主なのだとぼんやり分かった。

女の人が先に立って、宝物殿への道を歩いた。でかい建物だと思っていたのが宝物殿だった。女の人
は暗証番号を押し、次に鍵を開けた。少しわくわくしてきた。

中に入ると、龍虎図が飛び込んできた。レプリカと全く違う。本物は本物だ。歩んできた年月が違う。虎は今にも飛びかからんばかりだ。龍は火を噴きそうだ。龍が火を噴くのかどうか知らないけれど。

「すげえ」

徹が叫んだ。

「ごゆっくり見てください」

女の人が説明をした。龍虎図に魅せられて、なんにも聞こえなかった。

猿回しのついたてを見てみると、受付の人が「裏も見てください」。裏を見ると猿がいた。

本堂を見た後、日本で一番小さい美術館を後にした。

「昔の人はすごいなあ。俺なんかなんにも残せへんけど」

「みんなそうだよ」

素直な気持ちになって言った。

「俺は子孫を残すぞ」

ぞをぞと言った。

何を威張っているのだろう。でも、それは私の子孫かもしれない。本尊は人差し指と親指をまるくして輪っかをつくっていた。下に蛇がいた。指は女性器で蛇は男根かもしれない。那智の三重塔で見た。春画みたいな仏画を思い出していた。徹は絵について何も言わなかったので私の幻覚かもしれない。みんな楽しそうにセックスをしていた。すぐに目をそらしたので詳しくは分からない。なぜ目をそらしたのだろうか？

それは原点だと思う。一人だけの好きな人とセックスをして子供を産む。その人と私だけの子供を産む。

帰りに橋杭岩はしぐいいわによった。

「もうデートは終わりやね」

徹が言った。

「デート？」

「デートと違うか。エッチもしてへんのに」

「エッチしたら夫婦や」

「そうか」

二人並んで夕闇が迫る橋杭岩を見る。朝とは違った趣があった。仏ほとけの姿のようだ。影が海面に落ち神秘的です。

橋杭岩に手を合わせた。徹は柏手を打った。徹には神様に見えるのだろう。私はなぜか少し泣いた。徹は私の肩をぽんぽんとたたいた。こいつの嫁になるのかも。

7 トルコ店の女

私の名前は奈緒子なおこ。夫はトルコ人。名前はフアーティ・オゼリ。だから私は奈緒子・オゼリ。

二人でトルコ店をやっている。でかいトルコの国旗を掲げて、トルコ石、のびるトルコアイス、トル

コの民芸品なんかを売っている。

近くに片田さんの店がある。のびるトルコアイスに飽きたら、トルコアイスを持って、片田さんの店に行く。片田さんは五〇才半ばで金柑ソフトを売っている。商売敵だがそんな感じは全くない。

トルコアイスを金柑ソフトに交換してもらおう。二人並んでアイスクリームを食べる。

ファーターイとは学生の時、トルコ旅行で知り合った。私より七つ年上だ。私を追って日本にやってきた。五年は東京に住んだ。私は大島出身ではない。東京の生まれだ。ファーターイの友達の友達がトルコ店をやめるので後任を探していた。三年前のことだ。今年、私は大島で三十回目の誕生日を迎え、ファーターイは三七才になった。私も言葉に苦労した。でも、客商売だから、ファーターイは私よりもっと苦労したと思う。おじぎの練習から始めていた。

大島は温暖な気候だ。自然もいっぱいある。招かざる客、台風も来る。冬には椿の花があちこちに咲く。人情も厚い。ファーターイも私もすぐに気に入った。買い物にも不自由しない。串本大橋を渡れば才

ークワもコンビニもエバグリーンもある。

フアーティは大島がふる里だとよく言っている。

よほどのことがないかぎりトルコに帰らない。

今年の六月に日ト友好百二十年祭があった。トルコ軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本町檜野沖で遭難して百二十年を迎える。トルコからの来賓も多い。

フアーティは張り切っていた。主に通訳のボランティアをした。友好百二十年祭は成功のうちに終わった。フアーティの姿が見えなくなった。トルコ館の椿ちゃんに聞くと、灯台の方に歩いて行ったと言った。灯台の螺旋階段を上がり、海の方にまわるとフアーティがいた。じっと海を見ている。トルコの方を見ているのだろうか。いつもの大きな背中が小さく見えた。私は足音をしのばせて、螺旋階段を下りた。

8 トルコ記念館の女

年が明け、二月の中頃になった。大島椿道路に私

(椿) が咲く頃だ。幸子さんと奈緒子さんと私でピクニックに出かけた。幸子さんはアリスを親に預けた。三キロ弱の坂道は三才の子には少しきつい。

私がおかず係。幸子さんはおにぎりサンドイツチ係。奈緒子さんはデザート係。冷凍食品をチンしてお弁当箱に詰めた。手抜きだ。

奈緒子さんの車で行った。幸子さんが近所の親戚に車を停めてもらう手配をしていた。奈緒子さんの運転はかなり怖い。

三人ともルンルン気分だ。

「ピクニックって久しぶり」

奈緒子さんが深呼吸しながらいった。

「椿ちゃん、徹君とドライブに行っただん？」

幸子さんが言った。

「那智の滝がすごかった」

「那智の滝？」

奈緒子さんが聞いた。

「奈緒子さんは行ったことないの？」

と、幸子さん。

「仕事、仕事だからね。フアーティと行こうかな

あ

「串本からあんまり遠くないし。勝浦のまぐろもおいしかったよ」

「フアーティは魚が好きだから」

平日だから、人は少ない。やがて椿道路につく。三千本の椿が植えられている。急に明るくなった。ほぼ満開だ。適当な場所を見つけて、シートを広げる。

私も手抜きだったが二人はもっと手抜きだ。幸子さんはコンビニおにぎり三個とサンドイッチ三パック。奈緒子さんは究極の手抜き、バナナ三本。私のおかずは好評だった。二人ともおいしい、おいしいと言って食べた。奈緒子さんは「作り方を教えてね」と、まで言った。フアーティが気の毒になった。でも、冷凍食品はおいしい。下手につくるよりもおいしいのかもしれない。三人は大きな口を開けてバナナを食べた。

「きれいなハンカチやね」

奈緒子さんが取りだ出したハンカチを見て、幸子さんが言った。

「イスタンブールで買ったの」

奈緒子さんがこたえた。確かに日本製では見られない色合いだった。

「このハンカチを落としたの。拾ってくれたのがオゼリ。それがなければ二人は出会うことはなかった。わたしもここにいない」

お弁当をしまい、ゆっくりと坂を下った。途中で幸子さんが突然言った

「幸子という名前が悪いのよ。顔は気に入ってるから変えたくないけど名前は変えたいなあ」

「私は椿だよ」

「私は奈緒子・オゼリだよ。でも、名前は変えたくない。運命なもの」

「でもアリスはかわいそうだよ。一生会えない父親の名前を背負っている」

三人とも黙った。

「あなたの名前にしたら」

奈緒子さんが言った。

「いやよ」

即座に幸子さんは言った。

三人は手をつないで椿道路を下った。

「椿ちゃんはずーっとここにいるの？」

幸子さんが聞いた。

「多分。ここが好きだから。海が好きだから」

私は言った。

「灯台も、水平線も、ここに住んでいる人も。当然、トルコ記念館も」

串本節を三人で歌った。

ここは串本 向かいは大島

中をとりもつ 巡航船

アラ ヨイシヨ ヨーイシヨ ヨイシヨ

ヨーイシヨ ヨイシヨ「コラシヨ」

(ハア オチャヤレ オチャヤレ)

奈緒子さんが歌い。幸子さんと私が合いの手を入れる。奈緒子さんは歌がうまい。美人だ。賢い。天は二物を与えずなんて嘘だ。二物も三物も与えてくれる。

気持ちのいい風が頬にあたる。

春は近い。

二〇一〇年一月二十六日 了

小説は主に投稿誌『星と泉』（星湖舎）に書いてきました。星湖社は経費も仕事もとても良心的な会社です。

女性を主人公にした短編小説が三作あります。『眠っている間に』イメージの断章を紡ぐように書きました。小説の種子は作者の生活にあります。例えば青木さんにとって、私はレジを通過する客の一人。それ以上でもそれ以下でもない。そんな青木さんが小説の世界で動き始めます。

『ムッシュ』私（作者）はお子様ランチが好きです。でも、注文できない。ロボットなら……。ロボットが心を持ち始める作品です。当然「死」も。

『一期一会の女』2010年の十二月に妻と南紀の旅行をしました。定年後のとても楽しい思い出になりました。そこで出会った様々な女性たち、多分二度と出会わな一期一会の女性たち。南紀の美しい風景と共に描きました。

『螢』川の記憶は二つあります。一つは中学生の頃、店の人や家族と行った川遊びの時のことです。旅館

の窓からぼんやりと川を眺めていました。誰かが、
「溺れたらしいわ。子供やて」と言いました。遠く
離れた向こう岸を何人かの人々が一列になり上流の
方にゆつくりと上がって行きます。箆をかけた水死
者を戸板に乗せて運んで行くのです。この光景は成
人になっても何回も思い出します。もう一つは父の
山小屋のすぐ下を流れる川です。父の夢は、川のほ
とりに小さな山小屋を建て、若い頃は忙しくて出来
なかつた鮎釣を思う存分することでした。夢は実現
し、私達家族も楽しく過ごしました。二つの川の記
憶が、『蜚』という小説になりました。